



檻の中の天使



日向 創 × 狛枝 風斗

— R18 —

Caution

- ✧ pixiv 作品「檻の中の幸せ」の加筆修正版です。
- ✧ 現代パロで 2 人とも大学生です。
- ✧ 日向が真っ黒で歪んでいます。狛枝がとても可哀想です。
- ✧ ネタバレはしていませんが、ネタバレの人が出てきます。
- ✧ らーぶらーぶハッピーエンドです。
- ✧ この物語はフィクションです。非公式な二次創作文ですので、原作のゲーム・アニメ・小説等とは一切関係ありません。

壇上に上がっていた講師が退出し終わる前に、狛枝はすぐさま机の上に並べられた教科書類を纏め出した。乱暴に鞆の中に突っ込んで、慌ただしく腕時計を見る。今から行けばギリギリだろう。しかし席から立とうという所で、目の前に立っていたらしい人物に真正面からぶつかってしまった。

「あ……っ！」

「っ悪い。そんなすぐ動くとは思ってなくて。狛枝…、今日も忙しいのか？」

心配そうに話し掛けてきたのは同じ学部の日向だった。あるキックケがあり、彼とは大学で一番言葉を交わす。とはいうものの自分から日向に声を掛けるのも恐れ多いので、会話のスタートは決まっていた。明るく優しい太陽のような人。狛枝にとつて、彼は希望に満ち溢れた大事な友達であった。

「うん、日払いのバイトがあつて…。その…、期日が明日までなんだ」

彼だけには事情は話してあったものの、大学の教室でおいそれと出せる単語ではなく、狛枝は言葉を濁しつつ今の状況を説明した。それを聞いた日向はすぐに察してくれたようで、更には急いでいるオーラを全身から放っていた。狛枝にささっと道を譲ってくれる。軽く頭を下げつつ、狛枝は「それじゃ」と手を振って、教室を出て行く。

借金、減らない。

狛枝は明細書の束を並べ、溜息を吐いた。築25年の安アパートは隙間風が入ってきて、年がら年中寒く感じる。白熱灯を点けるのも電気が惜しく、蝋燭に火を灯すという徹底した節約っぷりだ。四畳一間の狭い空間に折り畳み式のちゃぶ台一つと煎餅布団があるだけで、他には私服が数点しかない。その私服のほとんども日向が「着なくなったからやる」と無理矢理押し付けてきた物で、彼には感謝してもきれないくらい世話になっていた。

日向は世話焼きな性分なのか、狛枝の事情を知ってから何かとアパートを訪ねてきた。料理を作り過ぎたとか、貰い物だがいらないからとか尤もらしい理由をつけて、狛枝に食料や生活雑貨を恵んでくれた。「友達から貰うなんて悪いよ」と断っていたが、内心は貰える物なら頂いておきたい気持ちでいっぱいだった。日向はそれすらも見抜いていたのか、「なら代わりにゴミを処分してくれ」と文を変えて、狛枝が断る理由を取り去ってしまった。

「日向くん…」

狛枝は恩人の名前をぼつりと呟いた。ただそれだけでこの絶望的な状況に光が差してきたように思えるから不思議だ。日向のお陰で自分は生きていくようなものだ。彼がいなかったら、今頃借金に押し潰されて命を絶っていたかもしれない。狛枝は穏やかな気持ちで明細書の束を封筒に仕舞った。借金を返したばかりで、財布はすっからかんだ。ありつく夕食などある訳がない。狛枝は水を飲もうと立ち上がった。蝋燭の光だけでは台所まで辿り着くのが精一杯で、

蛇口は手探りで探し当てる。冷たい金属質に触れた狛枝は、反時計回りにそれを捻った。が、雫は1滴も落ちてこない。

「あ…。そういえば、水道止められてたんだっけ」

きゆるきゆると鳴る腹を擦りながら、狛枝は硬く薄つぺらい布団を畳の上に敷いた。その中にモゾモゾと潜り込みながら、唾をゴクリと飲み下し、空腹を誤魔化す。明日も借金返済が続くのだが、日向の顔を頭に浮かべれば、何だか乗り越えられそうな気がした。

*

『なあ、お前…。何しようとしてんだ？』

『え……』

靴を脱いで、橋の手摺によじ登ろうとしている狛枝に声を掛ける人物がいた。深夜0時を過ぎた時間帯。駅から離れた住宅地で街灯の明かりも心許なく、人通りは全くないと言っても良い。だからよもや自分を止めようとする人間がいるなどとは夢にも思わなかった。辺りは暗く、相手の顔すらも見えない。通りすがりに興味はないので、狛枝は人影にチラリと視線をやっただけで、すぐに正面に向き直った。

『…何って、見れば分かるでしょ。ここから飛び降りるんだよ』

狛枝は下方に流れる真っ黒い川へと視線を落とした。水量が多いことでも有名な川だ。雨は降ったりしていないが、普段の水の勢いからすぐに溺れることは簡単に予測出来た。現に今まで何人かこ

こで命を絶っている。先人達は楽に死ねたのだろうかなどとぼんやりと考えながら、狛枝はそろりと足を前に出そうとした。

『ダメだ、止める!!』

『うわっ!!』

足を抱えるように掴まれ、狛枝はぐらりとバランスを崩す。ふわっと浮かんだと思ったら、背中に衝撃が走る。だがアスファルトに叩きつけられることなく、狛枝の体はその通行人にしっかりと抱き締められていた。

『死ぬなんて、…絶対ダメだ!』

『…っ、離してよ! このまま生きてたって、絶望しかないんだ!!』

掴まれた腕から逃れようと必死にもがくが、何日も食べ物を口にしておらず、元々非力だった狛枝は力では勝てなかった。がっしりとした温かい腕が体に巻きついていて。その時初めて、相手が男であると認識した。身を振るがいつまで経っても離してくれない。先に待つ絶望と命を救われた安堵感でぐちゃぐちゃになった狛枝は嗚咽混じりに涙を零した。

『お願いだよ…、ボクを死なせて…っ』

『死なせない』

『っ!! キミに何が分かるの!?! 初対面だよね? 事情を知らずによくも抜け抜けと…!』

『知らないけど。俺はお前を死なせたくない。生きていてほしい。…それじゃ、ダメなのか?』

言い聞かせるような優しい声色に、狼枝はハツとして、振り向きざまに男を見た。男の年齢は狼枝と変わらないくらいで、短い焦げ茶色の髪をした青年だった。彼を見た瞬間、確かに初夏の陽光のような暖かみを感じた。真つ直ぐに向けられる眼光から目を逸らせない。虫の音色が良く聴こえる橋の上で、狼枝は日向と初めて出会った。

*

「日向クンの…、夢…」

ゆつくりとまどろみから意識が浮かんでいく。日向との最初の接触は大学ではなく、自殺者が絶たない日くつき橋の上であった。あの時のことは今でも鮮明に覚えている。心身ともにボロボロだった狼枝を日向は放っておかず、自分のアパートまで引つ張つていき、温かい食事と一晩の寝床を与えてくれたのだ。神様だと思つた。絶望に塗り潰された地獄のような未来に、日向は希望として燦然と輝いていた。

「大丈夫。ボクは今日も頑張れるから…。…日向クン」

祈りを込めて彼の名前を呼ぶのは、毎朝の儀式のようなものだ。狼枝は布団から起き上がると、バイトへ向かうために支度を始めた。

胸に日向という希望を宿したものの、狼枝の借金はちつとも減らなかつた。何というか…返せてはいるのだが、それを上回る金額を

借金しているのだ。

借金の入り口は遠縁の親戚だった。事業に失敗したという話を涙ながらに語られては支援せざるを得ない。幸い貯金には余裕があったので、狼枝は無言で万札の入った封筒を差し出した。親戚は狼枝に対し土下座で礼を言うと、小躍りしながら帰っていった。

そこからじわじわと出費が増えた。外に出れば事故や災難に遭い、その弁償は何故か狼枝に強いられる。首を傾げつつも払つていたが、やがて貯金が底を尽いた。そんな感じで私生活がゴタゴタしている内に、金を貸していた遠縁の親戚は音信不通となった。仕方なく学生でもローンが組める消費者金融に手を出したのだ。その時はバイトでもして返せば良いと軽く考えていた。大学は奨学金で通つていたので出来るだけ辞めたくはなかつた。

狼枝は明細書の金額を凌ぐた。複数から借りている所為で借金は雪だるま式に増えていつている。1つのローンを返し終わつたら、また別の金融会社から返済の催促が来る。そんなことを繰り返す内に、契約している金融会社は6つにもなつていった。

「無理だよ…、日向クン。日向クン、ひなたクン…」

ぼたりと明細書に雫が落ちる。自分の目から零れた涙が次々と明細書の数字を濡らしていく。いつになったらこの地獄は終わるのだろうか。もしかしたら永遠に終わらないのかもしれない。必死にバイトして働いても返し終わるのは不可能だ。売れる物は全て売り払つた。身1つで他に持ち物なんてない。

「……………いや、ある」

「猫枝の呟きは小さなものであったが、犬小屋のように狭いアパートには良く響いた。売れる物…、自分自身だ。パソコンも携帯電話もないので調べられないが、そういった仕事もあるはずだ。水商売である。実際に襲われたことは幸いなかったものの、猫枝は日頃から同性に情欲を孕んだ瞳で見られることが多かった。自身に需要があることは自覚している。」

「明日…、学校で調べてみるか」

他に手段などない。約束したのだ、日向と。絶対に命を絶つたりしない。だったら可能なことは全てやる。猫枝の決意は固かった。

*

次の日の昼休み。猫枝は早速コンピュータ室に向かった。自分のIDでパソコンにログインし、すぐさまインターネットを開く。検索欄にそれらしい単語を入力し、検索を掛けた。1秒も経たない内に画面が切り替わり、猫枝の知りたい情報が雑然と並べられる。猫枝は同性愛者ではない。何をどうするか知識は臆気ながらあつたが、一生関係ないものだと昨日まで信じていた。一先ずやるやらないは置いておいて、どのくらい稼げるものなのかを真剣に読み進めていく。

「結構ピンキリみたいだね…」

「何がピンキリだつて？」

「!」

背後から突然声を掛けられて、猫枝は勢いよく振り向いた。そこには日向が立っている。いつの間…。いくらモニタに夢中になってたとはいえ、真後ろの足音を聞き逃すなんて。猫枝はウィンドウを閉じそびれ、おたおたと画面を隠すようにさり気なく立ち上がった。日向は呆れたように腕を組んで、こちらを軽く睨む。

「猫枝、こんな所にいたのか。ちゃんと飯食つてんのか？ お前…」

「大丈夫。ちゃんと食べてるから」

「…嘘つけ。食べた形跡全くないぞ」

指し示されて、猫枝は口籠つた。パソコンが鎮座している机の周囲には食べ物らしいものは置いていなかった。今日は持ち合わせがなく、水を飲んで飢えを凌ごうと思っていたのだ。黙り込んでしまった猫枝の肩に日向はそつと手を置いた。

「お願いだ。もつと俺を頼つてくれ。昼飯くらいだったらいつでも奢つてやれるからさ」

「でも、ボク…」

「何遠慮してるんだよ、今更。友達だろ？ 変に気なんて遣うな」

「……………、日向、クン…」

名前を呟くと、反射的に涙が出てきた。驚く日向の顔が涙で歪む。猫枝は情けなくもその場で泣き崩れた。止めようにも涙は後から後から零れてくる。日向は慌ててポケットからハンドタオルを取り出すと、そつと猫枝の目元に当てた。

「お、おい、猫枝…。泣かないでくれよ」

「ひっ…く…く…っ、ねえ、日向クン。ボク、苦しいよ…。いつにな

「つたら終わるの？ う…っ、努力は必ず報われるって言うけど、本当にそんな日が来るのかな。毎日毎日景色が灰色で、楽しいことなんて1つも無い！ 何もかもがボクを追い立てるんだ。お金、お金、お金…。そんなの…っ、ボクが1番良く分かっている！ ……どうすればいい？ ボク、このままじゃ生きていけない！」

「…狛枝」

「しゃくり上げながら切れ切れの言葉で訴える狛枝に、日向は困ったような顔をした。無関係の彼に何を言っても意味がないと分かっているのに、吐き出さなければやつてられなかった。泣いている狛枝を日向はそっと抱き寄せてくれる。頭を優しく撫でられ、狛枝は日向の肩口に顔を埋めた。」

「偉いな、狛枝。お前は良く頑張ってるよ…」

「っ…ん…っひ、あた、クン…っ…ふっ…」

「…っ…っ…っそこそこか」

「え…っ？」

「何か変な言葉を聞いたような気がして顔を上げたが、そこには菩薩のような笑みを携えた日向がいるだけだった。今のは聞き間違いか何かだろう。狛枝は太陽の瞳をじっと見つめる。力強い綺麗な色が大好きだった。日向は狛枝の希望そのものだ。」

「とりあえず、腹が減ってるのは良くない！ コンビニ行くぞ。弁当着ってやる」

「日向クン…」

「それから！ お前はアパート引き払って、今日から俺の所に泊ま

れ。それで家賃分、借金返せるだろう？」

「でも…っ」

「生活費のことは気にするな。1人増えたって変わらない。俺が心配なんだ」

日向はビシッと指を突き付け、「俺の胃に穴開けたくなかったら言うこと聞け」と冗談っぽい口調で言い放った。何て、人だらうか。ここまで自分を気遣ってくれる人がこの先現れるとは思えない。さつきとは違う思いが胸に込み上げ、狛枝はまた目頭が熱くなった。「狛枝は泣いてばかりだな。大丈夫、俺がいるから。俺は…お前の味方だから…」

「うん…、うん…。ありがとう、日向クン。…ありがとう」

「何度礼を言っても足りない。どうやって恩返しをすればいいのかわからない。彼が友達になつてくれて良かった。あの時橋の上で会った幸運に心から感謝をする。涙でぐずぐずの狛枝に柔らかない笑みを向けながら、日向はコンビニエータ室の扉を指し示した。」

*

「狛枝が安アパートを引き払い、日向のアパートに居候するようになって1週間が過ぎた。相変わらず借金はあったが、返済出来る額は以前と比べて確実に増えた。日向が一緒にすることで心の平穏を取り戻せたのが大きい。朝・昼・晩、寝食を共にし、規則正しい生活をするので体の調子も良くなった。休めそうな講義の出席や

レポートも日向に助けてもらっている。水商売をすることもなかった。とうか日向と四六時中一緒にいるので、如何わしいバイトなど出来るはずもなかった。少しずつだが借金は減っている。金融会社の数はやっと4つになった。闇の中に一筋の光が見えてきたのだ。しかし僅かに見えたその希望の光も、ある一瞬の出来事で呆気なく打ち砕かれてしまった。

*

その日の狛枝は美術館の清掃員のバイトをしていた。掃除は元々得意であったし、数多くの美しい絵画や芸術品が展示されている美術館は狛枝の心を癒した。落ち着いた空間で仕事に取り組めることを嬉しく思いつつ、美術品の壺が置いてある展示台を丁寧に拭いていた時のことだった。突然、壺が割れたのだ。何の前触れもなく、粉々に。狛枝は壺に触れてはいない。そもそもそれはガラスケースに入っていて、傷付けられる状況ではなかった。

誰も壺を割ってはいない。最初の内は怪我はないかなどと心配していた美術館の館長であったが、手違いでこの壺が保険に入っていないことが分かると鬼の形相に変わった。狛枝をヒステリックに責め立て、一番近くにいたのは狛枝ということで莫大な賠償金を請求してきたのだ。

「こんなの、払えない…」

狛枝はアパートのフロアリングに膝を突き、館長に手渡された請

求書に視線を落とした。今までの借金より0が1つ多い。とてもじゃないが、バイトをして払えるような額ではない。どうして自分ばかりこんな目に遭うのだろうか。日向と生活していた日々が幸せ過ぎて、怒った神様が自分に不運を送りつけたのかもしれない。遣る瀬無さで胸がいっぱいになって、ぶつけようもない虚しさで狛枝は啜り泣いた。だがいくら目を擦っても、請求書の金額は変わることはない。それが狛枝に残酷な現実を突き付ける。

何もする気が起きず、しばらくそのままボーっと座り込んでいた狛枝の耳に、玄関からガタガタと物音が飛び込んできた。キロロツクがガチリと縦に回り、その向こう側から同居人が「たたいま〜」と言いながら顔を見せる。

「日向、クン……。おかえり…」

「お、たたいま。あれ？ 今日晩飯、お前の当番だったよな？」
いつもこの時間に香ってくる夕食の匂いがなく、日向はそれについて問いかけてくるが、狛枝には返す言葉がなかった。そういえば今日は自分が夕食の支度をする日であった。「こめん」と口の中で謝った言葉は小さ過ぎて、日向には届かない。

声を出そうにも唇が動いてくれない。また借金を増やしてしまった。世話になっている日向にどう釈明すれば良いのか全く分からな。頭はズキズキと痛み出し、視界がぐわんぐわんと大きく揺れる。気分は最悪だ。みしりみしりと木製の廊下が軋み、リビングに日向が現れた。のろのろと狛枝は視線を上げる。2人の視線が克ち合った途端、日向の顔は見る見る内に驚嘆に染まっていった。

「…つ、猫枝、泣いてるのか!？」

泣き腫らした猫枝の顔に日向はすぐに気付いたようだ。乱暴にシヨルダーバッグをリビングに投げ捨て、一目散に猫枝の傍へと駆けっていく。そして悲痛な面持ちのまま、猫枝の目線に合わせるように膝を突いた。

「どうしたんだよ、猫枝! 何があつたんだ? もしかして…つ、借金が原因で危ない目に遭つたんじゃない?」

「…………。日向クン、それは違うよ…」

何をどう説明すればいいのか分からなかったが、とりあえず彼の質問には首を振って否定する。しかしその後言葉が続かない。黙つて床を見つめるだけの猫枝に痺れを切らしたらしい日向はキョロキョロと辺りを見回す。そして床に落ちてゐる紙に気付き、それを拾い上げた。

「何だよ、これ…………つ! 壺? 壺が、こんな値段段すんのか!？」

請求書に書かれた金額に、さすがの日向も驚いたようだ。肩は小刻みに震えていた。琥珀の瞳はカツと開き、紙のある1点を穴の開くほど見ている。無理もない。その価値は六百万円を超えていた。猫枝が割つたと因縁をつけられた壺は著名な芸術家が手掛けた、世界に2つとない逸品だった。一般人に名前を知られているほど有名ではなかったが、美術分野に関して学のある人間ならすぐに分かるぞうだ。

「…めんね、…日向クン。ボク、もうここには居られないよ。今すぐ出てくから…」

「つ! ダメだ! 借金が増えたくらい何だよつ。あんなに頑張つてきたのに、ここで諦めるのか!？」

日向は鬼気迫る表情で猫枝の肩を揺さぶる。猫枝の1番近くで支えていた彼だからこそ言えるセリフだ。猫枝が日向のアパートに転がり込んで、1ヶ月が過ぎていた。バイトのスケジュールを把握し、私生活の面はもちろん大学の講義まで手を回してくれた。朝早く出ていく猫枝のために夜の内に食事を準備し、夜は疲れて帰ってきた猫枝を温かく迎入れる。バイトを無理に増やそうとしようものなら「もつと自分を大事にしろ」と叱咤を飛ばし、猫枝の給料日にはまるで自分のことのように喜んでくれる。毎日極限まで体を動かしていたが、彼がいてくれたお陰で挫けずに済んだ。だが、今は…。

「でも…、日向クン。これでボクの借金は一千万円を超えたよ。今までとは違うんだ…! キミに迷惑は掛けられない」

「…行かせないぞ、絶対に!! 俺は猫枝を見捨てない。いつか来るから…。借金返し終わつてさ、こんなこともあつたなつて笑つて話せる日がいつかきつと来る。それまでは意地でも離れない」

心に響く力強い言葉。猫枝を貫く太陽の瞳。日向に見つめられ、ドキドキと猫枝の胸が高鳴る。どうしてだろう? 何故彼はこうまでして、自分を助けてくれるのだろうか? 疑問に思つた猫枝は日向におらずおずと問いかけた。

「ねえ、日向クン。キミはどうして、ここまでボクを助けてくれるの? 何の取り柄もない、ボクなんかのことを…」

「……どうしてって、言われても…。放っておけないからとしか俺、狛枝のこと…好きだし」

「え…」

日向の口から零れた『好き』という言葉にドキッとする。狛枝が硬直したのを見た彼は慌てて首を振った。

「いや、いやいやいやつ、違う違う。その…変な意味じゃなくて友達だからさ、困ってたら何とかして助けたいんだ」

顔を紅潮させながら、日向は早口で捲し立てた。恐らく恥ずかしいのだろう。狛枝からさつと視線を外し、モジモジと居心地悪そうにしている。何て美しい心の持ち主だろう。狛枝は日向の清廉さに胸を打たれた。天使か何かが人間に姿を変えているのではないだろうか？ 日向から溢れ出る眩しさを目の前にして、狛枝は自分の醜さを強く感じた。自分のような汚らしい人間が彼の傍にいて許されるのか。心の中で自問自答を続ける。

「狛枝。今日とはかく飯食つて寝ろ。難しいことは明日にしよう。俺も一緒に考えるから…」

「ごめんね…、日向くん。ごめん…。ありがとう…」

涙を拭って、狛枝は立ち上がる。狛枝の足元がふらついているのを見た日向は「今日は俺が飯作るから待ってる」と肩を押して座らせた。狛枝は何となくして希望を蘇らせようと、台所へと背中を向ける日向を見つめるのだった。

借金が増えても、結局やるべきことは変わらない。毎日あくせく働いて金を稼いだだけだ。しかし狛枝は以前よりも日向のことを強く意識するようになった。日向も狛枝も男であるのだから、恋愛関係になれるなどとは微塵も考えていない。そもそも抱いている気持ちが悪愛感情なのかも疑わしい。今はただ彼の傍にいられるだけで十分だった。日向が自分と一緒にいてくれるのは借金があるからだ。憎らしい明細書達もそれを考えれば多少は心が和らぐ。

夜も11時を越えた頃、業務から解放された狛枝は日向のアパートにやつとの思いで辿り着いた。渡された合鍵で玄関を開けると、いつも出迎えてくれる同居人が姿を現さない。しかし靴はあるし、電気も点いているから室内にはいるようだ。

「あれ？ …日向くん」

ダイニングテーブルの上にはラップを被せた夕食が並んでいるだけだ。リビングの隅に荷物を置き、洗面所で手を洗おうとすると、隣の風呂場から水を叩くような音が断続的に聴こえた。シャワーに入っているのかと狛枝はホッと息を吐く。さつさと夕食を食べようと考えると、ダイニングの席に着いた。

「日向くん、こんな所に鞆置いちゃって…」

何故かテーブルの下に日向が愛用しているショルダーバッグが置いてある。足で蹴つてしまおうなので、ソファに避難させようと狛枝はそれを手に取った。ファスナーが開いていて、何やらパンフレットのような物が飛び出している。プライバシーに関わるのなら、視線を逸らしてなるべく見ないようにするのが同居人としての

ルールだと狼枝は思っている。だがチラリと見えた『学生ローン』というゴシック体に反射的に一度見をした。

「何、これ…」

明るい黄色で彩られたパンフレットからはおどろおどろしい雰囲気など感じられない。だが狼枝は消費者金融に関しては、自慢ではないがそれなりに知っている。彼らは初心者でも足を踏み入れやすいように、プラスイメージだけを表面に散らす。安心です、信頼出来ませ、負担は軽いです。気安さを押し出して、それを撒き餌に獲物を釣り上げるのだ。

『おひさまローン。』

初めての方、女性のお客様、学生さんも大歓迎！

お客様のご都合に合わせて、返済期限を決められます。

返済スケジュールは専属スタッフがきっちり管理！

まずは電話・インターネットからお問い合わせを』

忌々しい常套句に狼枝はチツと舌打ちした。消費者金融のクセに綺麗事を抜かすなど反吐が出る。しかしそんなことはどうだつていい。重要なのはこのパンフレットが日向の鞆から出てきたこと。

「まさか……っ、日向くん……」

多額の借金を抱える狼枝を見兼ねて、自らも消費者金融に手を出したのではないか。わなわなと手を振るわせ、狼枝はパンフレットを凝視する。混乱で動けなくなっていると、やがてシャワーの水音

が止み、リビングのドアからパジャマ姿の日向が顔を見せた。

「狼枝、帰ってきたのか。おかえり。…狼枝？」

「ひ、日向くん…、これって」

「えっ、あ、いや…それは…っ、誤解だ！俺は別に…」

狼枝の手にある消費者金融のパンフレットを見て、日向は顔面蒼白になった。血相を変える日向に狼枝の心臓がドクンと大きな音を立てる。まさか…、まさか…。

「…日向くん、ここでローンとか組んでないよね！」

「あ…何だ、そっちな。それは駅前のピラ配りのやつで、お前とは何も関係ないから」

「本当に？ お金借りたりとかしてない？」

「ああ、借りてないぞ」

狼枝の念押しに日向は頷く。嘘を吐いているようには見えない。

安堵から狼枝は腰が抜けてしまい、その場に座り込んだ。

「はあ…、良かった。ボクの所為でキミまで借金地獄に陥ったら、

どう責任を取れば良いんだろっつて考えちゃったよ」

「鞆に突っ込んだままで捨ててなかったただけだ。驚かせちゃったみたいだな。すまなかった…」

一方的に勘違いしてしまった狼枝が悪いはずなのに、日向はしょんぼりと肩を落としている。自分は少々神経過敏になっていたのかもしれない。狼枝は「ボクの方こそごめんね」と日向に声を掛けた。

その夜。1人リビングで床に就いた狛枝はぼんやりと思考を巡らせていた。今日見つけたパンフレットのことだ。狛枝の心配は杞憂に終わったが、もしかしたらこの先日向が狛枝の借金をどうにかしようと金策に走るかもしれない。自分のことで日向に迷惑を掛けることだけは避けたかった。

「うっ……、ごめん…、ひなたくん…、日向くん、日向くん…」

布団で頭を覆い隠して、狛枝は枕を涙で濡らす。自分はこのようにすべきではない。前々から分かっていたけど、日向の優しさに甘えてついつい長居をしてしまった。潮時だ。明日になったら出て行こう。大好きな日向と別れるのは辛いことだが、自分の所為で彼を苦しめる方がもっと嫌だ。大して荷物もないし、出て行くだけならすぐ出来る。どこかの公園で野宿をして過ごそう。ゴミムシである自分にはその生活の方が似合っている。狛枝は涙を零しながら、自嘲した。

*

日向が大学から戻ってくる前に出て行く。朝からそう決めていた。立つ鳥跡を濁さず。自分の物だけを鞆に詰め込み、借りていた物などは丁寧にテーブルの上に並べる。もう2度とここには戻れない。1ヶ月ほどの共同生活だったが、思い出は楽しいものばかりだった。このままここにいたら、きっと自分はダメになる。それではないのだ。一千万円もの借金を1人で返さなくてはならないの

だから、なりふり構ってられない。大学も辞める。最後まで手を出さか迷っていた水商売に身を躰す覚悟も決めた。

「日向くん、今までありがとう」

本当は直接言いたかったが、会えば必ず日向は自分を止めるはずだ。彼に懇願されたら、決意が揺らいでしまう。

狛枝は借金の明細書を1枚1枚確認しながら、封筒に入れていった。しかしあの日割った美術館の壺の請求書を見た時、その手の動きは止まる。

「……………あれ？」

その請求書には作者名、作品タイトル、金額しか書かれていなかった。そのことについて違和感はないが、別のことが狛枝の心に引っ掛かった。

『何だよ、これ……………っ！ 壺…？ 壺が、こんな値段すんのか!!』

日向は確かにそう言った。ハッキリと『壺』と口にしていった。だけど…。

「請求書には『壺』なんて単語、どこにも書かれてない」

何故？ どうして彼はこの作品が壺であることを知っていたのだらうか？ 日向も狛枝も所属している学部は美術系ではなく、日向がその分野に興味があるようには思えなかった。モヤモヤとした霧が胸を塞いで息苦しい。妙な違和感を覚えた狛枝は請求書に隅から隅まで目を通したが、答えは見つからなかった。何かがおかしい。

「猪枝が腕を組んで、壺を割った日のことを思い出そうとしていると……。」

ピンポン♪

タイミングが良いのか悪いのかインターフォンが鳴った。今は夕方4時頃だ。日向はまたた講義を終えていない。宅配便か何かだろうと思つた猪枝は請求書をテーブルの上に置いた。配達物を受け取つて、ハンコを押すことくらい自分にも出来る。そんな軽い気持ちで猪枝はスコープを覗かずに、玄関の鍵に手を掛けた。

「おう、テメーが猪枝か!？」

「あ……っ」

ドアを開いた先には中年の男が3人並んでいた。どの人物も猪枝とは面識がない。だが屈強な体躯と殺伐とした顔立ちから、堅気のものではないことは明白だった。猪枝はすぐにピンと来た。返済の期日を守つてもらっている会社が1つあつたのを思い出す。彼らは借金取りだ。借金を返さない猪枝の元へ取り立てに来たのだ。消費者金融はバックに裏社会の人間がついているなどと聞いた覚えがある。噂に過ぎないと思つていたが、本当のことだつたのかと猪枝は震え上がった。

「おい、何黙つてんだ。テメーは猪枝 風斗なのか?」

「え……、と……あ、の……」

ドスの利いた声に猪枝の体がビクリと跳ねた。相手は凄んでいる

訳ではないようだが、その鋭い眼光は猪枝を射殺すには十分だった。恐怖に動けなくなつた猪枝にイライラと男の1人が玄関に足を踏み入れる。

「質問してんだ、さつさと答える。簡単だろう? イエスかノーだよ、ほら」

「は、はい……」

「そうか、やつぱりお前か。もう分かつてるよな? カードローン会社、マネーキングの人間だ」

「……っ!」

予想が的中してしまい、猪枝は恐ろしさから歯の根も合わない。「登録が前の住所のままだった。テメー、とんずらこくつもりだったんだろ」

「ち、ちがつ……違い、ます……!」

「まあ、んなことはどーでもいいか。居場所が分かつたんなら無意味だ。さて……テメーが30万円借りたのが、2ヶ月前だったな。返すのは手数料と利息を合わせて53万円。期日はとつと過ぎてんだ。とつとと返しな」

男はそう言つて、掌をヒラヒラさせてくる。返せるものならとつとに返している。別の消費者金融からの督促が先日来たばかりで、それを返済してしまつたので財布は空だ。給料日は後1週間ほど先で、貰える金額も53万から程遠い雀の涙ほどの金額。どう考えても返せない。

「す、すみません……。今日は無理……です」

「知ってるぜ」

男がそう言うつと、周囲の2人がゲラゲラと笑い出す。日向クン、日向クン…。怖いよ、助けて…！ 狛枝はひたすら心の中で日向の名前を呼んだ。だけど彼がやってくるはずもない。

「払えないってんなら、体で払ってもらうしかねえな。精々親に感謝しろよ？ 綺麗な顔して生まれてきたことを…」

下卑た笑みを浮かべた男が狛枝の顔をスツと持ち上げる。怖い。怖い怖い怖い…！ 男が示唆している自分の未来に身の毛がよだつた。誰とも分らない好きでもない人間に体を自由にされる。絶望的な未来に、狛枝の額から冷や汗が吹き出してきた。

「こんなに震えちゃって、可哀想にな。だが借金をしたのは自分だよ。恨むなら自分を恨むんだな」

全くその通りであった。借金をしたのは自業自得なのだ。ゴミムシが幸せを感じるなんておこがましい。社会の底辺でゴミらしく汚らしい仕事で金を稼ぐべきだったのだ。男に乱暴に腕を引っ張られ、狛枝は靴を履いた。いつか借金を全て返し終わったら、その時は日向に会いたい。いや会わずとも遠くから一目彼を見たい。きつと自分には日向のことが好きだった。その気持ちさえあれば乗り越えられるかもしれない。

「さくさく歩け。手間取らせんな」

男にそう吐き捨てられ、アパートの外へと出ようとした所だった。

「待て！！」

借金取りとは違う高めの声が夕暮れのアパート前に響き渡った。

聞き慣れたその声に狛枝はハッと顔を上げる。そこには息を切らせた日向が立っていた。キリッとした表情で3人の男達へと近付いていく。ダメだよ、日向クン！ この人達は一般人じゃないんだ。そう叫びたかったが、狛枝の唇はパクパクと動くだけで言葉が出てこない。

「狛枝をどこに連れていくつもりだ？」

「…誰だ、お前」

「この家主だよ。こいつは俺の同居人なんだ。勝手に連れてかれたら困る…！！」

見るからに剣呑な雰囲気を感じている男達に、日向は果敢にも詰め寄っていく。狛枝はその様子をハラハラと見つめていた。

「狛枝さんはねえ…、うちに借金をしてらんだよ。今すぐ返済は無理だと言うもんだから、まずは事務所で社長と話してもらわないといけねえんだ」

「…その必要はない」

やけにハッキリと言い切る日向の言葉に驚いたのは借金取りだけではなかった。狛枝は男に手を掴まれたまま茫然としていた。ただの否定ではない。彼は『必要ない』と言ったのだ。日向の言っていることの意味が良く分からない。

「何だあ？ あんちゃんがこいつの借金を払ってくれるのか？」

「つ！！ 日向クン、それはダメだよ！ これはボクが…」

「気持ち的には払いたい、けどな。そんなことしたら狛枝が怒るから…」

目を細めて日向は穏やかな笑みを狛枝に向けた。恐怖に脅えていた気持ちが柔らかく融かされ、不安が消えていく。

「テメーは何がしたいんだよ。邪魔するのなら、」

「邪魔はしない。ただどあんたらに渡す物があるんだ。それを見てからでも狛枝を連れていくのは遅くないぞ」

「日向、クン……?」

日向はポケットを探り、何やら掌サイズの四角い物を取り出した。財布のように見えたが、それにしては少し小さい。ボタンと開いた中から白い紙が出てきて初めて、それが名刺入れであることが分かった。だが日向は大学生だ。就職のために名刺を用意する大学生がいるなどというテレビの特集を見たことがあるが、そんなことを彼がするとは思えない。そうこうしている内に日向は男達に順番に名刺を手渡していった。

「初めまして。ヒナタファイナンス、代表取締役社長の日向創です」

「………は?」

狛枝は日向から飛び出た自己紹介に堪らず疑問の声を発した。彼は何を言っているんだ? ファイナンス……? 社長? 啞然としている狛枝を余所に、借金取りから返答が返ってくる。

「へえ……。あそここの会社は随分と若い社長が仕切ってるって聞いてたが、こんな若造とはねえ」

「言っておきますが、名刺は偽物じゃありません。狛枝が御社にしている借金はどのくらいですか?」

「…借金に手数料、利息。締めて53万だな」

借金取りは借用書とその他諸々の証明書類を日向に突き出した。それを一瞥した日向は顎に指を添え、何やら考えるような素振りを見せた。

「さすがに今は持ち合わせがないな……。…明日改めて御社にお伺いいたします。それでよろしいですか?」

「とか言つて逃げるんじゃないぞーな!」

「まさか……。マネーキング、でしたっけ? お噂はかねがね聞いてます。しつこい取り立ては業界でも評判ですから。とりあえず今日のところはこれでお引き取り下さい」

日向は鞆から出した財布から万札を数枚取り出し、リーダー格の男に押し付ける。それを受け取った男はその一枚を摘まみ上げて、日向を敵意の籠った目付きで睨んだ。

「んだあ? おいおい、坊主……。こんな金で借金チャラにしようなんて言わねえよな?」

「当たり前です。これはアパートまでご足労頂いたのと1日待ってもらうことに関しての、ほんの感謝の気持ちです。タダで帰すこととはしませんよ」

「………」

ニッコリと笑う日向に、狛枝は言い表せない不気味さを感じた。こんな彼は、知らない。別人だ。偽者だ。借金取りはニヤリと唇を吊り上げ、狛枝の腕から手を離す。解放されたという安心はあったものの、それ以上の違和感と不信感で狛枝の心はいっぱいだった。

「狛枝、狛枝…。大丈夫か？」

「…日向、クン」

気がついた時には男達はいなくなっており、アパートの前には日向と狛枝だけが立っていた。今のは何だったのだろうか？ 正常に働かない頭で狛枝は日向を見た。いつものように優しい表情で狛枝を憂える日向。以前は安らぎを覚えたその顔も今ではざわざわと胸騒ぎがするだけだ。

「ギミは…、一体、何者なの…？」

「…今まで黙ってて悪かった。俺はさつきも言った通り、金融会社の社長だ」

日向はそこで言葉を切り、狛枝の手を取った。本人の口から明確にそれを伝えられた。借金取りに話したことはハツタリなどではなく真実だった。握られた手は温かい。置かれている状況と日向から向けられる視線のギャップに狛枝は眩暈がした。

「ここで話すのも難だし、アパートに戻ろうか」

「うん…」

2人連れ立って、アパートに戻る。カーテンを閉めていない室内にオレンジと紫のグラデーションが差し込んでいた。日向はふらふらと動きの鈍い狛枝を何度も見やりながら、手を引いてリビングまで連れて来てくれた。テーブルに向かうように座らせ、コップに水を注いでそと置く。狛枝の隣に腰を下ろした日向は、やがてぼつりぼつりと話し始めた。

「俺は大学生だけど、消費者金融をやっている。ほら、前にお前が

見た『おひさまローン』あれだよ」

「あの時の…」

記憶に残る黄色いパンフレット。あれを経営していたのが目の前にいる日向だなんて、今でも信じられない。何とか落ち着こうと狛枝はコップの水を飲んだが、何だか喉に引っ掛かるような感じがして、一口だけ飲みテーブルに戻した。

「パンフレット見られた時は会社を経営していることがバレたのかと思っただけど、そうじゃなかったんだよな。お前はそういうの大嫌いだっただから、中々言い出せなかった…」

「ごめんね、日向クン…。ボクの借金を肩代わりしたんだよね？ さつき渡してたお金も、絶対返すから…」

「……………」

表情を暗くする彼にズキンと狛枝の胸が痛んだ。金融会社を経営しているという事実はショックではあったが、取り立てから狛枝を守ってくれたのは紛れもなく日向だ。借金をしている狛枝のことを考え、彼は必死に正体を隠していた。日向とは友達だし、好意を持っている彼に対して、嫌悪感など湧くはずもない。だがその考えも後に続く日向の一言でバラバラに砕け散った。

「気にするなよ、狛枝。初めからそのつもりだったんだ」

「…ッ!? な、何…？ それって…、どういう意味かな？」

初めからそのつもり？ 何を言っているのだろうか。説明を求めて、狛枝は日向に水を向ける。日向が会社のお金を使って、狛枝を助けてくれた。そうではないのだろうか？ 怪訝そうに日向を見やると

彼はニコニコと満面の笑みを浮かべている。何やら狂気染みた感覚を受け取り、狛枝は背筋が凍った。

「初めからってのは言葉通り、親戚の借金からだ。色々と苦労したよ。裏で手を回して、借金背負わせるの。お前が行く先々で遭う事故や災難、あれは偶然じゃない。……だって俺が仕組んでることだからさ。不運でも何でもないんだ」

「え……」

軽く日向が言い放った。借金を背負わせる？ 何かの間違いではないか？ そう思いたかったが、日向は言葉を訂正することもない。自分ほとんどないことに巻き込まれていたのか？ いや、友達である日向がそんなことをするはずがない。ひたひたと近付いてくる絶望の足音から耳を塞こうとして、狛枝はある出来事に思い当たった。そうだ、彼は知っていたのだ。狛枝が割った美術品が『壺』であることを……。

「……………。もしかして、美術館の壺も……？」

「そうだよ。まさかあんなに高いとは思わなかったな。でもお前が絶望してる顔が見れて、すごく興奮したよ。全身の血が騒いで仕方がなかった。あの顔だけで数え切れないくらい抜いたんだ。ははっ……思い出したら、また勃ってきた……」

日向は顔を赤く染め、涎が口の端から零れ落ちる。狛枝の頭の中では、今までの日向との思い出が走馬灯のように蘇っていた。どうしても信じられない。日向はいっただって自分を心配して助けてくれた。狛枝の精神が安定していたのは日向のお陰なのだ。彼がいなか

ったら、自分はずっと自決していた。

「嘘だ……。だってあの橋の上で、キミはボクを救ってくれたじゃないか！」

「うん。俺も運命だと思う。あれは本当に偶然だった。たまたま夜に喉が渴いて、コンビニに買い出しに行った時にお前が橋から飛び降りようとしてたから。間に合って良かったよ」

くすくすと楽しそうに日向が笑った。愛情が籠った手付きで狛枝の髪を梳き、耳を撫って、頬を撫でる。絶望の足音は狛枝の背後でピタリと止まった。

「……………そんなにボクのこと、嫌いだったの……？」

「それは違うぞ……！ 俺は狛枝が、好きなんだ。入学式で初めてお前を見た時の衝撃は今でも覚えてる。綺麗で優げで……。憂いを帯びた悲しげな表情に一目惚れしたんだ。ずっとずっと、お前のことが好きだった。どうしても手に入れたくて、何日も考えた。狛枝が俺のものになってくれる方法を……」

日向の手は狛枝の存在を確かめるように優しく滑っていった。鎖骨から胸元へと手が這わされ、狛枝はビクンと体を痙攣させる。目の前には息を荒げた日向がいた。生温いか吐息が顔に掛かっている。彼は狛枝の上から覆いかぶさり、すんすんと匂いを嗅いでいる。

「何、言ってるの？ キミは……、ボクの、たった1人の友達なんだ……。何で、」

言いたいことが纏まらず、狛枝は喘いだ。いくら呼吸をしても胸が苦しい。ぶつきたい気持ち迷走し、頭の中はぐちゃぐちゃだっ

た。自然と涙がぼろぼろ落ちていく。それを見た日向は「はあ…と感慨深げに溜息を漏らし、落ちた雫をねっとりとして舐め上げた。

「ひゃっ」

「ああ、可愛いよ…。猫枝…！俺は借金を全て返済し終わって喜ぶお前が見たいんじゃない。借金に苦しむお前の顔をずっと見ていたいんだ！絶望に打ちひしがれているお前が、俺は大好きなんだ。辛いのに悲しいのに、涙を堪えて耐えているんだよな。偉いよな。頑張ってるよな。でも救われない！くっくっ…、本当に健気で…、最高だ…！好きだ、好きだ、好きだよ！猫枝」

日向は猫枝の背中に腕を回して、抱き締めてきた。服から香る洗剤の匂いは猫枝のものと同じで、それは今まで同じ屋根の下で生活してきた何よりの証だ。熱く火照った日向の体から逃げ出そうと、猫枝は力なくもがく。

「あ、ああ…：っ、嫌…、嫌だよ…。日向くん、お願い…」

「お前は本当に泣き虫だな。昨日の夜も寝ながら泣いてたよな？盗聴器付けてるから分かるんだよ。だから借金取りに連れて行かれることにも気付けたんだ」

「止めてえ、…離して…：っ、うっ…、日向くん…、日向くん…」

「あの夜も今みたいに何度も俺の名前呼んでたよな。嗚咽混じりにごめんって謝ってき。可哀想過ぎてソクソクした。あんなに俺を煽るなんて、猫枝は酷い奴だな。朝お前が出て行つてから枕を舐めたら、しょっぱかったよ。でも美味しかったぞ、猫枝の涙の味…」

耳元で囁き、そこにキスを落とす。顔を上げた日向の瞳は暗く淀んでいる。いつか見た太陽のような輝きはどこへ行ってしまったのだろうか。絶望が猫枝の背中をあやすように優しく撫でていた。猫枝が涙を落とす先から日向がペロリとそれを飲む。その所為で猫枝の目元や頬は日向の涎でベトベトになった。

「ずっと今の生活が続けば良かったんだけどな。今日みたいに傷付けるような奴がいるのなら話は別だ。猫枝も嫌だよな？あんな怖い男達に囲まれて、生きた心地しなかったら？あの後、あいつらがお前をどうしようとしてたか分かるか？慰み者にしようとしていたんだ。俺の猫枝を…。絶対に、許せない…!!」

「ひぐ…っ」

温和な日向の顔が一瞬にして、鬼へと変わる。背中をギチリと爪が強く食い込み、その痛みから猫枝は声を引き攣らせた。声を聞いた途端、日向は元の物柔らかな表情に戻り、慌てて手を離してくれた。

「ごめん、猫枝。痛かったよな」

「…ううん、平気」

日向は傷付いた猫枝の背中をやんわりと撫でる。慈しむような眼差しはまるで子供を抱く母親のようだ。猫枝には分からなかった。あの異常な感情をぶつけてきたのにも関わらず、以前のような優しい彼も確かにそこに存在する。背中を撫でながら日向は言葉を繋げた。

「大丈夫だ、安心してくれ。取り立てなんて邪魔なだけだし、全部

返済しよう。借金は俺の会社が全部肩代わりしてやるからな。何も心配しなくて良い」

「……………」

「…その代わり、俺のものになってくれないか？ 猪枝。一千万でお前の体を買いたい」

真剣な顔でぎゅっと手を握られ、猪枝は口を開けなかった。日向は猪枝を金銭的に救うと言っているが、礼を言う筋合いはない。何故ならば借金の原因は日向自身なのだ。彼が色々な工作をして、自分に借金を背負わせた。拳句の果てに一千万で体を買取するなどと言っている。狂っている。歪んでいる。だけど日向に凜とした表情で見つめられ、猪枝の心は甘く痺れていく。何だか顔が熱くなってきた。頭がボーっとして、反論する気も失せていく。

「俺はあいつらみたいに酷いことはしない。絶対に猪枝を傷付けない。危険がないように部屋の奥に仕舞って、大事に大事に可愛くてやるから。好き、猪枝…好き。愛してる。頼む…、お願いだ。お前がほしい…」

日向は猪枝にかしずいて懇願した。優しさと狂気を秘めた太陽の瞳。憐れで異常な男を猪枝は見下ろした。

彼が決定的に誤解している点が1つある。それは借金を背負わせないと、猪枝が自分の物にならないと思っていることだ。借金に苦しみながらも、日向と過ごした安らかな日々。例え彼が狂っていたとしても、あの日々は嘘ではなかった。日向から離れたくないという気持ちは変わらない。記憶を辿りながら、猪枝は日向をそっと

抱き返した。

「猪枝…？」

別に借金なんて必要なかった。彼が自分を好きだと言ってくれた時、猪枝は心が震えるほど嬉しかったのだ。真剣に想いを告げられたら、断る理由もなかっただろう。日向となら友達を超える関係になっても良かった。だがそれは今言っても仕方がないことだ。

「日向くん…、あ…っ」

「猪枝、こまえた…、猪枝…っ」

ゆっくりと押し倒されて、首筋に顔を埋められる。柔らかく唇で甘噛みされて、猪枝は溜息を漏らした。日向の手がするりと猪枝のTシャツの隙間から侵入する。肌を滑る別の生き物の感覚にゾクゾクと快楽が走り、欲望が鎌首を擡げて起き上がった。

自分に一千万円の価値があるかどうかは分からない。それは日向が決めることだ。これから先2度と彼と友達として笑い合う日は来ないのだろう。それを考えると悲しかったが、もう戻ることは出来ない。猪枝を一千万で買ったということは、あの楽しかった日々を捨てたことと同義だった。

「うっ…ひっ…く…、ん…っ…っ、んんう…」

「泣いているのか？ 猪枝。…ああ、良い顔だ。俺なんかに買われて絶望的なんだろう？」

日向に問われたが、猪枝は答えることなく泣き続けた。こんなに傍ににいるのに伝わらない。擦れ違ったままの自分と彼。どこで間違ったのかと考えるも、日向から送られる熱烈なキスで何もかもが吹

き飛んでいく。

Tシャツから入ってきたかさついた指先が狼枝の腹部を優しく撫でる。それはゆっくりと肌の感触を楽しみながら、胸の飾りへと辿り着いた。乳首の突起をくりくりと弄られ、狼枝はムズ痒い刺激に反射的に体を振らせる。その素振りを逃げようとしたと勘違いしたのか、日向は空いている手で力強く狼枝の腰を挿んだ。

「うあ……！ ひ、日向くん？」

「ダメだ……。狼枝、頼むから……逃げないでくれ」

「あつ……、ボ、ボクは……」

「逃げてでも無駄だ。……お前、一千万も払えないだろう？」

言葉だけ聞けば脅しとも取れるセリフだが、眉を下げて心配そうに言い聞かせる様を見てしまえばとてもそうとは思えない。自分が受け止めてあげなければ、日向はショックを受けてしまうだろう。自分を貶めた真犯人であるのに何故か憎むことが出来ず、狼枝は襲いくる虚無感に脱力した。歪んでしまった太陽の光はもう元の輝きに戻らないのだろうか……。動きを止めた狼枝に安心したらしく日向は小さく嘆息した。そして震える手で恐る恐るTシャツを裾から捲り上げる。

「夢みたいだ……。ずっとお前のこと、好きだったから……」

うっとり頬を染めて日向は嬉しそうに笑った。そして独占欲と支配欲に駆られたギラギラとした雄の瞳で、狼枝の体を隅々まで視線で舐め回す。僅かに片鱗が残っていた。明るく優しい友達としての彼はその刹那静かに影を潜めた。日向はどんな思いで自分と同

じ屋根の下で過こしてきたのだろう。こんなに情熱的に狼枝を欲しているのだ。生半可な想いではなかったというのは簡単に理解出来た。

脱がせたシャツを辺りに放り投げて、日向自身も性急に服を脱ぎ捨てる。その下から出てきたのは、男なら理想とするような筋肉質で締まった無駄のない体だった。一言で言えば、圧巻。鍛えられた胸筋はせり上がり、腹直筋は薄くだが6つに割れている。平々凡々な顔立ちからはとても予想がつかない体つきだ。外から射し込んだ夕焼けの紫色が滑らかに日向の体に帯を作る。狼枝は同性愛者ではないが、しばしその肉体美に見惚れてしまった。

「狼枝、好きだぞ。大好きだ……」

「あ……っ」

日向が狼枝の耳元で湿った声で愛の言葉を囁いた。ああ、これから彼に抱かれてしまう。彼の手で自分の常識と生き方を変えられてしまうのだ。言い知れない遣る瀬無さから目の奥がツンと傷んだ。日向への恐怖心はない。あるとすれば誰かと体を交える初体験への恐怖。狼枝は不安に苛まれながら、目をぎゅゅと瞑りドキドキと日向を待った。しかし彼はいつまで経っても攻めてくる気配がない。不思議に思っ目を開けると、そこには真っ赤な顔で自分を見下げる日向がいた。

「いめん……。俺……、初めてだから」

「？ ……え、初めてって……」

「誰かとういうこと、したことないんだ……。でも痛くないよう

に：頑張るから」

「狼はその言葉にひゅつと息を飲んだ。正直、意外だった。好きな人を手に入れようとするあまり監禁してしまうほど異常な思考の持ち主が、誰とも交わったことがないなんて…。狼の想像以上に日向の希求は根深かった。盲目的に自分を想っているのだ、この男は。日向の手が首筋から這わされ、触れられた所からふつふつと鳥肌が立つ。狼は訳の分からない昂ぶりに突き動かされ、我慢出来ずに引き纏った声を上げた。

「あつ…、そんな、ん…ツ、ふ、ああ…っ」

「すべすべしてて、良い匂いがするな…。甘くて、すごく美味しそうだ」

「押し掛かってきた日向の体はとても熱く、下腹部にある硬いペニスがかごりごとと狼の太腿に刺さった。同性である自分に性的に興奮しているのが良く分かる。」「狼、狼」と口の中で名前を吐きながら、日向は狼の体に口付けを何度も落とす。ぬるりとした舌先が首筋を移動し、鎖骨を食むようにして体を丹念に舐めた。

「はあはあ…。狼、美味しい…。もつと、もつと…！」

「んんっ…く、ああ…っ、ひなたくん…いやあ…ッ」

「ペロペロと犬のように舐め回されて、狼はビクンと体を痙攣させた。ゾクゾクと背筋が逆立つて、全身が心地好く痺れていく。それと同時に体の奥から熱が生まれるのをハッキリと感じ取った。日向によってじわじわと自分の体が作り変えられているのだ。乳首をちゅうちゅうと吸われ、べとべとの舌で転がされて、カリッと歯を

立てられた。もう片方は上から指の腹で潰されて、爪の先でチクリと刺されている。ピリツとした痛みが乳首からじわりと体に染み込んでいく感覚に、狼は堪らず熱っぽく吐息を零した。

「くっ…ふ、んんっ…はああ…ッ」

「乳首…硬くなってるぞ、狼…。痛いの、気持ちいいのか？」

「…っちが、違う…よ…、あつ…は、はあ…っ」

「髪の毛を振り乱して否定するが、日向は薄らと笑っただけで狼を貪り続けた。その唇が、舌が、指先が…留まることなく刺激を与え、日向の体温に当てられたのか、狼は段々と全身が熱くなってきた。それを抑えようと汗が徐々に染み出て、はあはあと思も荒くなる。

「狼も…、初めてなんだよな。ははっ…初めて同士だな？」

「んんっ…ああ、ん…っ、あ、…ふ、うう…」

「恐らく狼の経歴を全て調査済みなのだろう。彼の言う通り、狼は誰とも付き合ったことがなかった。女性は綺麗だとも可愛いとも感じるが、異性として意識するまで長い時間を特定の誰かと過ごしたことはない。誰かに欲情する日が来るのかと音を傾げるほど淡白で、自慰の経験も乏しい。そんな自分が日向に蹂躪されて、快感に身悶えしているのだ。日向は膨らんできた狼の股間に気付き、ズボンの上からやわやわと撫でた。

「チンコも勃ってきてる…。なあ、もう脱がせても良いよな？」

「っ!? あう…、ダメえ…日向くん…ッ！ やだよ、見ないで、んふう…」

「猫枝の拒絶をさらりと流し、日向はベルトに手を掛けた。カチャカチャと下方で金真の音がして猫枝の頭は一瞬冷えるが、止めさせようと手を伸ばしてもニコツと笑った日向にやんわりと掴み取られてしまう。ジ…とチャックが下げられて、チェック柄のボクサーパンツが顔を出した。布地が先走りに濡れてグレーの濃淡を濃くしているのに気付き、猫枝は思わず顔を手で覆う。」

「猫枝も、感じてたんだ…。チンコから厭らしい汁出して」

「い、言わないで…っ。あはあ…、あ…っ…」

「もっど気持ち良くしてやるからな。大丈夫、俺も一緒だから…」高揚した顔で日向は猫枝からするするとズボン抜き取った。太腿を夢見心地に撫でていたかと思えば、舐めたりしゃぶったり歯形を付けたりと好き放題にする。膝裏に大量に掻いた汗も、ジュルジュルと飲み込んで、日向の舌は膝を緩慢に擦った。脛骨に沿って慈しむようにキスを落とし、足の指を一本ずつ口に含む。唇から溢れた唾液が猫枝の足裏をつつと流れていった。足を舐めるという倒錯的な行為にビクビクと猫枝は体を震わせる。」

「ああ、猫枝…。綺麗だ。んっ…じこもかしこも、本当に」

「んあ…ん、ふ…ふうう…ッ、や、舌…やだあ…」

「一千万なんて、安い買い物だよな…。俺の、俺だけの物なんだ。猫枝…」

もう片方の足も余す所なく舐められて、猫枝は啜り泣く。日向のことは好きだが、想いが通じ合っていないまま体を重ねるのは嫌だった。しかしそんな気持ちとは裏腹に体は本能に正直で、猫枝のペ

ニスには半勃ちのまま萎える気配を見せなかった。日向はいくつも足にキスマークを付けていく。ちゅっちゅ…ときつく吸い上げられ、猫枝は痛みすら感じた。

太腿を撫でていた手がふいにパンツに掛かった。足を執拗に舐められていた所為で、ペニスからは何度も先走りが放たれている。日向にもそれはバレていただろう。足を愛撫しながらも彼はずっと猫枝の股間を事細やかに観察していたからだ。舐める度にピクンと。パンツの中でペニスが揺れるのを見て、満足そうに目を細めていた。「…っや、んんっ…ひ、ひう…日向クン…。お願い、そこ…は…触らないでえ…」

「その頼みは聞けないな。俺は…猫枝の全てを可愛がるって、決めているから」

猫枝の懇願に日向は首を振り、パンツのゴムに指を引っ掛けて下げた。中に収まっていたペニスがぶるんと勢いよく飛び出す。完全ではないが半勃ちになっている自身を猫枝は信じられないといった目で見つめた。

「あっ、あ、ああ…っ！う、そ…、嘘だ…。何で、こんなに…」
「びしょ濡れじゃないか、猫枝…！…すこいぞ」

ペニスの先端から滴った先走りは半端な量ではなかった。芯全体を濡らし、双球にまで及んでいたのだ。その淫靡な蜜は僅かな光を反射し、艶々している。急いで足を閉じようとするも日向の力強い腕で止められてしまった。ググツと太腿を無理矢理二こ開けられ、じっと見つめられる。日向は爛々と目を輝かせ、ペニスをそっと握

つてきた。ぐちゅう…と淫音が聴こえ、狛枝は恥ずかしさからカツと顔が熱くなる。日向の指が鈴口を弄るとドクドクとカウパーが溢れてきた。

「はあ…っ、狛枝は感じやすいんだな…。可愛い」

「んっ、んううう…ひっ…ひいんツ、い、ああ…んツ」

集中的に感じる部分を攻められ、快感を纏った刺激に思わず狛枝は背中を撓らせた。とにかく胸が苦しかった。深く息も吸えず、思い通りに声も上げられない。未知の刺激に体のありとあらゆる神経が叩き起こされて、全身がとても繊細に感覚を拾い上げていくのだ。止めてほしい…。日向を止めようとぶるぶると力なく手を伸ばすが、彼は容赦することなく狛枝のペニスを扱いた。

「聴こえるか？ 狛枝…。グチュグチュ…っ。ほら、俺の手がこんなにベタベタだ…！」

「ア…ツ、いやあ…っ、ふ、あうう…ボクじゃ、な…」

「チンコがさ…、気持ちいい気持ちいいって泣いてるんだ…。はあ、はあ…！」

「んひっいいい…っ！ あ…。な、に…？ は…んうう…」

突然ぬるりと生温かい何かにペニスが包まれ、狛枝は悲鳴を上げた。一体何が起こっているのだろうか？ そのしつとりと濡れた「何か」が日向の口内であることに気付いたのは数拍後のことだった。勃起した狛枝自身を右手で支え、日向はちゅぶちゅぶと亀頭を頬張っていた。パツと口を離れたかと思えば、今度は裏筋を舌でチロチロと擦り、更には芯を揉むように横から甘噛みする。

「やつ、やだあ…ダメだよ、ひあたクン…っ！ ふう…んツ」

「ちよつと酸っぱい…。ああ、でも…狛枝はチンコも、おいしいいな…」

「アンツ、あつあつ…ひ、ひああつ…！ おちん、ちん…食べないでえ…ツ」

「…んんっ、狛枝のだ…！ ああ…、俺ずつと、ずつと…！」

「ひな、…アあんツ、あ…は……ツ、んっ、んあ…はっはふ…」

気持ち良くて、意識が飛びそうだ。朦朧とする意識の中下方を見やれば、開かされた足の中央で日向が夢中で狛枝のペニスをしゃぶっていた。硬い髪質のクセ毛が上下に動く度に揺れる。じゅぼじゅぼぬちやぬちやと股間から淫らな水音が響き、非日常的な光景に狛枝は頭がおかしくなってしまうようだった。唇から唾液を零しながらひたすら喘ぐだけで、他にはどうすることも出来ない。

「あんう…っひ、ひいんツ、あ、ひあたクン、やつ、んつやあああツ」

「んむ…んっ、んっ…狛枝…っ、こまえた…！ 腰…揺れてるぞ…」

くつくつと楽しそうな日向の笑い声が聞こえたが、もう気にする余裕などなかった。飲み込まれたペニスが舌で可愛がるように転がされ、口の中でじゅうじゅうと犯される。そこから生まれるどろりとした溶岩のような真っ赤な熱が狛枝を支配し、背中にはじつとりと汗を掻いた。寒くもないのにガタガタと体が震える。自分の体が自分の物ではなくなつたかのように言うことを聞かない。前触れもなく全身に鳥肌が立ち、下腹部に熱が集まつてきた。

「ああっ！…や、くる…、あ、アッ、ひあ…たクン…ッ！ ああ、アああアあ…ッ！」

「!! 狛枝 出せ…。受け止めてやるから。お前の…精子、飲むぞ…！」

日向は鈴口を舐めながらそう言うと、一気に狛枝のペニスを喉奥まで飲み込んだ。その瞬間、狛枝の頭の中でパンッとかかガスパークする。背筋にビリリと電撃が走ったかと思えば、ビクンビクンと全身が跳ねた。額からふわりと冷や汗が浮かび、体に纏わりついていた熱がすうと引いていく。

「あ…？ あ…っ、つ、はあ…、は…ッ、んう、ああ…！」

頭の中がぐるぐる回っていて、体を横たえているはずなのに地面が揺れているような錯覚を起す。狛枝は何が起きたのか分からなかった。ずっしりと部屋の空気が重く押し掛かっており、体を動かすのも億劫だ。彼は一体自分に何をしたのか？ 視線だけをそろりと動かすと、そこにはペニスを啜えた日向が変わらずいた。ゆつくりと顔を上げ、目だけで微笑んだ彼は、ちゅうつと吸い上げるようにして口からペニスを抜く。一瞬舌先に見えた白い粘液。狛枝自身から飛び出たその欲望を、日向は満足そうな顔でゴクリと嚥下した。

「あ…、ひなたクン…？ ねえ、今…何を…」

「ん…狛枝の…ところで、はあ…すこ濃かったぞ。しばらくしでなかつたのか？」

「!! まさか、キミ…ボクのを…、飲んだの？」

「……だつて欲しかったんだ。好きだから、欲しくなるんだよ…」

日向は狛枝に寄り添うようにして寝そべり、ふわふわとした髪をそつと撫でつけた。頬に軽くキスを落とされたが、その唇がついさつきまで自分のペニスを舐め回していたことを考えると生理的な嫌悪感がこみ上げてくる。狛枝は眉を僅かに顰めたが、日向は機嫌が良いらしく表情の変化に全く気付かなかつた。頭を抱えるようにされて、抱き締められる。

「狛枝…」

「…っ、な、何…？」

「愛してる」

「…日向、クン」

ドキツと心臓が甘い鼓動を響かせた。好きな人に真剣な顔で愛の告白をされたら、流石に狛枝もボーカーフェイスを保てない。唇を噛み締めて顔を逸らすのが、視界の端にある琥珀がじつと自分を見ているのが分かった。凜々しい眉とキリリと上がった力強い瞳。少しだけ以前の輝かしい光を取り戻している。ああ、やはり好きだ…と狛枝は思った。この太陽の瞳が狛枝の心を捉えて離さない。

「俺…、お前の中に入りたい…」

「え…っつ」

「狛枝と…、1つになりたい」

日向は狛枝の手を取り、甲にちゅつと口付けた。そして指の付け根や爪の先にもキスの雨を降らせる。お伽噺の王子が姫にするような振る舞いに狛枝は顔が熱くなった。日向の恋人になれたら、こんな風に愛してもらえたのだろうか。いや…、実は自分は彼と恋人同

士なのではないか？ 皮膚に感じる日向の唇の感触に幸せを感じ、口元を綻ばせていた所だった。

「嫌だなんて、言わせない。お前は俺のものなんだから…」

温かな幸せに包まれていた心が氷の刃で一突きにされた。狛枝は囁かれた言葉にひゅつと息を飲む。そうだ、忘れていた…。一千万で自分は日向に買い取られたのだ。絶望的な現実が狛枝の未来を黒い闇へと引き込む。

茫然とする狛枝を抱き締めたまま、日向は再び狛枝のペニスを弄った。その後ろにある双球もやんわりと揉みしだく。数秒も経たない内に触られた箇所が熱を帯び、むくむくと赤心が硬く膨らんでいった。

「狛枝はチンコ弄られるの、気に入ったんだな」

「そ、んな…：んっ、んうう…う、はああ…ッ、あ、あふ…」

「だって、もう濡れてるじゃないか…。言ってみろよ、チンコ気持ちいいって」

「…っあ、やだ…よ…、ふっん、あアンっ…絶対、言わな…い…」

弄られて気持ちが良いだなんて言える訳がない。売女のように快楽を口にする行為は気が引けた。自分は男なのだ。本来ならば女を組み敷いて抱く側である。それなのに情けなくも日向に押し倒されて、体を好きにされている。それが悔しかった。借金で買われたゴミクズにもプライドくらいはある。一向に従わない狛枝に日向も

段々と腹が立つてきたのだろう。穏やかだった表情が段々と曇り、視線が鋭いものとなる。

「……………言え」

「んっ…：はっ…はあ、あ…ッ、んううう…ッ、いや…だ、」

「狛枝…っ、どうして俺の言うこと聞かないんだよ…!!」

ビリビリと空気が震えるほどに日向は吠えた。憎々しげに顔を歪め、狛枝を上からねめつける。殺されると錯覚するほどの迫力に狛枝はビクリと体を跳ねさせた。しかし怖いと思つたのも一瞬だけですぐに日向はハッとし、怯える狛枝にあたふたし始める。カタカタと戦慄く狛枝の背を恐る恐る抱き寄せて、目に僅かに浮かんだ涙を指先で拭った。

「ち、違っんだ…っ、狛枝…。俺は、本当は…、…くっつ、どうして」

「……………」

「もう…、分かんねえよ…ッ」

グシャグシャと髪の毛を掻き毟った日向がぼそりと言葉を漏らす。眉間に皺を寄せて奥歯を噛み締めた苦悶の表情に、狛枝は胸が苦しくなった。きっとこれが彼の本音なのだろう。後悔しているのだ。どうしてこんなことになってしまったのか…。狛枝だけでは、なかったのだ。

「日向くん…」

「良いん、だよな？ 狛枝…。…そうだよ、これで良いんだ。お前が手に入ったのなら、俺はこれ以上に望むことなんてない」

「っ…あ、ああ…!!」

「良かった…、お前がいてくれて。狈枝さえいてくれれば、俺は他に何もいらんんだ…」

勃起した狈枝のペニスを撫で、彼はソファの下から何かを手にとった。ピンク色の蓋にハートマークの飛び散ったボトル——所謂ラブローション、というやつだろうか。パチンと蓋を開けて掌に液体をたっぷりと出すと日向は手を開閉させた。ローションが糸を引きながらくちやくちやくと厭らしい音を立てる。濡れた指先が狈枝の窄まりをくにくにと押しした。

「こんな所まで綺麗なんだな、狈枝。…ちよつと苦しいけど我慢してくれよ？」

「…え、あつ！ ま、待つて…日向クン、ねえ…お願い、…：うあつー！」

ずぶうと指が突き立てられ、狈枝は異物感に呻いた。ローションの滑りを利用して奥まで入り込むと、ずちゅずちゅと出し入れをされる。腸壁をマッサージするように指が中で動いているのが分かった。最初は痛いだけのそれが、慣れてきたのか少しずつ引いて脱力感を伴っていく。

「んあ…、アツ、ふああ…ん、んう…」

「指、増やすからな…」

拡げられたアナルの脇に2本目を捻じ込んだ。「ぐっ…」と狈枝は息を詰まらせ、足をビクンと痙攣させる。

「はあ…っ、はあ、くる、し…：や、んっ、んふ…」

「きつっ…もつと体の力抜けよ、狈枝。これじゃ入らんないだろ？」

「っ…：む、り…だよ、も…抜いて、…んく…ッ」

息を切らしながら愁悶に喘ぐ狈枝を見かねたのか、日向は縮こまっている狈枝のペニスをもう片方の手で包み込んだ。あやすように撫でられ、敏感な部分を刺激された狈枝は否応なく後ろを締めてしまふ。

「あう…っ！ あ、っ…：そこは…、んっんううう…！」

「…少しは楽になったか？ まだまだ続けるからな」

「う…、うう…：…」

「ああ、今ので柔らかくなってきたな。狈枝の中…あつたかくて、気持ち良いぞ」

恍惚の表情で日向が呟く。抽挿のスピードが速くなり、ずちゅぶちゅと派手な水音が聴こえてきた。アナルの内側が圧せられ、更に指を増やされたのが分かった。埋め込まれた3本の指はバラバラに動いて、狈枝の中で暴れ回る。狈枝のペニスはいつの間にか大きく硬く反り返っていた。日向が前を弄っているのもあつたが、それよりも後ろで感じてしまっているのだ。

「あつ、アンっ…、!? やああああ…！ やつ、んっ…ひい…ッ！」

「…!!…（こ）かっ？ （こ）が良いんだな…？」

「ひあたクン…、あ…アアつ、ん、はあはあ…ア、う…：んう」
アナル奥の腹側にあるしりり。そこを押されるとカッと瞬時に体中の血液が沸騰する。汗が滝のように吹き出し、ガクガクと足が痙攣するのだ。今まで与えられた快楽が子供だましと思えるほどに強

烈で、まるで爆発するかのごとく甚大な衝撃だ。ニヤツと薄ら笑みを浮かべた日向はずるりと指を勢いよく引き抜いた。そして自らのズボンのベルトを外し、パンツごとズボンを脱ぐ。

「ひっ……!!」

それを見た途端、狛枝は声が出なかった。中からぼろんと現れたのは太く逞しい男根だった。『規格外』。狛枝自身とは違って、色は浅黒くずっしりと重量感がある。ビク…ビク…と興奮で震えている。幹にはドクドクと血管が脈打っていて、鈴口はバクバクと開閉を繰り返しながらカウパーを滴らせていた。凶器とも思えるそれに狛枝は血の気が引いてしまい、するすると後ずさりをしてしまう。

「狛枝? …ははっ、そんなに驚くことないだろ? …こら、逃げるなって」

自身の大きさには頓着してはいないらしい。日向は軽く笑って、狛枝の腰を挿んで引き寄せた。性に淡泊と言っても、男同士がどうやって性交渉を行うのかくらいは知っている。アナルを解されたことからこの後どうするのかは明白だった。足を開かされ、その中央に日向が体を割り入れてきた。ピタピタと湿った先端が狛枝のアナルをノックする。

「はー…、はあー…っ! 行くぞ、狛枝……!」

「うあ……っ、ひっ…く、やらあ…、やめ、て……!! ん、ぐうう……!」

指とは比べ物にならない質量がグツと狛枝の中へと入ってきた。日向のペニスだ。あまりの大きさに狛枝は声なき悲鳴を上げた。大

量の血流を巡らせているのか、燃えているかのように熱い。

「あ…、あつ……!! つう、ひう…ん、ん…いたつ…! 痛い、よお…」

「うっ、ダメだ、全然…入らないぞ。狭過ぎる……!」

「おしり、いたあい……、ひあたクウン…おちんち、いやあ…。ふうん…」

ズキズキと鈍く痛む後孔。あまりの痛さに狛枝はぼろぼろと涙を流した。本来受け入れる場所ではない所に無理矢理挿れられているのだ。内側がみちみちと膨げられ、尋常でない圧迫感が狛枝を襲う。口から内臓が飛び出てしまいそうだった。日向は泣き出す狛枝を気にする余裕もなく体を前に倒し、少しずつ欲望を中へと埋め込んでいく。ふーっふーっとならぬ興奮気味に息を吐き、眉を凛々しく上げた雄の顔だ。

「やっど…半分、だ。頑張ってくれ、…狛枝」

「はうう、……は、んぶん…? うそ…、これ以上は、入んない…よお……!」

嫌々と首を振って髪を振り乱すが、日向は聞き入れてくれない。涙で濡れた顔に髪の毛が張り付くが、狛枝は気にせず泣きじやくる弱々しく日向の胸板を押し返そうとしたが、その手首を掴まれて床に縫い付けられた。そして更にペニスが奥へ奥へと入っていく。繋がった部分が焼けるように熱く、体の感覚が麻痺してしまった。

「うあアあ…! いれないで、…っん、いれあいでしょう、…おちんちん、きらあい…ッ」

「あああああ〜…、入つてく…。すこい、すこい…！ 全部入ったぞ、猫枝あ…」

「っ…は、ん…う、はい、た？ 日向クンの、おちんちん…ボクの中、に？」

腕に力を入れて体を起こすと日向自身が確かに根元まで猫枝の中に入っている。下腹に意識を集中させれば、確かに体内で日向の怒張が息づいているのが感じ取れた。とうとう…1つに、なつてしまった。友達と二線を越えてしまった悲しさから猫枝はさめざめと泣く。対する日向は愛しい人と体を繋げられた嬉しさから乾いた笑いを漏らしていた。

「……猫枝、…やつと…やつと、だ。俺は…この日を夢見て、一緒に過…してたんだよ」

「あうっ…、ボクは…、ボクは…、こんなの…」

「幸せ…、だな。猫枝の最初の人は俺で、俺の最初の人は猫枝…。ははっ…あははっ…はあ…！」

天井を見上げた日向は陶然と深く息を吐き出す。アナルを収縮することに日向の形がハッキリと伝わってきて、これは現実なのだと改めて突き付けられる。涙と鼻水と涎で顔はぐちゃぐちゃだったが、拭こうにも腕を上げる気力すらない。しゃくり上げながら猫枝は日向との生活を思い出していた。

『猫枝、授業の方は俺に任せとけよ。教授には上手く言っとくから』
『ありがと。今日はボク久しぶりに早く帰れそうなんだ』

『良かったな！ ずっと働きたばなしだし、1日くらいゆっくりしてもバチは当たらないと思っぞ』

『うん、そうするよ。日向クン、晩ご飯は何が良い？』

『…あー、久しぶりに刺身とか食べたいな。手巻き寿司！』

『あはっ、それならボクでも出来そう。じゃあ、準備して待つてるからね…』

この会話もそんなに遠くない日のことだ。借金の苦勞を分かち合いながら、2人で1つ屋根の下で過…してきた。ささやかながら楽しいことにも恵まれ、幸せな毎日だった。日向との大切な思い出1つ1つがふいに思い起こされ、猫枝の脳裏から離れない。しかしその綿菓子のような記憶を掻き消すかのごとく、ズシッと重い衝撃が猫枝の体を襲った。

「!? んひいつ、ひ…なた、クン…！ な、何…、ひあああつ！」

「ヤバい…、堪らない…!! あ、ああつ…しるところで…ねっとり纏わりついてきて、くそ…！」

腰が引かれたかと思えば、ペニスでずんと中を抉られる。日向が律動を開始したのだ。指では届かなかった所まで熱い塊が侵入し、ごりごりと猫枝のアナルを押し抜ける。男のペニスなど入れられたくないが、そんな思いに反してアナルはきゅうきゅうと嬉しそうに飲み込んでいた。

「ああアア…っ!! やあ、うぐ…、う、うっ…やえて…!! おっきいの…くるし、」

「狛枝つ、狛枝あ！ 気持ち良いつ、最高だ！ 穴がぎゅうぎゅうに締まって…、んっ」

「んあああッ、んい…！ うああ…奥、だめっ、らめえ…！ ゆるして…、ああアッ！」

「っはっ、はあ…！ ああああ…、こまえた…！ 突いてやるからな、さつきのとこ」

「…ふあ？ つひぎいいいい…！ ひい、んひつい…ッ、あつ、あ、ああんっ！」

反り返ったペニスの先端に奥のしこりを思いつきり突き上げられて、狛枝は絶叫した。お腹が破れてしまいそうなくらいの質量がごりごりと奥を突いてくる。萎えていた狛枝の本能がふるふると震えながら勃ち上がった。それを見た日向はニヤリと口角を上げ、ピストンをより一層激しくした。ずちゅずちゅと擦られた肉壁が熱を持ち、狛枝の体を蕩かしていく。全身が熱に浮かされ、何もかもがもうどうでも良くなってきた。

「あんっ、アアンっ！ あアッ、はああつ、ひい…ひあああッ…！」

「は…エロいな、狛枝。分かるぞ、気持ち良いんだよな？ 俺のチンコで感じてるんだよな？」

「やあ…ひなたくん、ちが、ちがう…！ んあっ…はう、あうう…っ！」

「これからはずっと一緒だから…。もっとたくさん抱き合っていて、いっぱい気持ち良くなるうな」

「あつアッはあんっ、ひんっ…ああアッ、あんっ！ やつ、ふっ…」

んふう…」

腰を挿んでいた手がすりと這って、狛枝の乳首に到達する。突起を指先でこねくり回されぎゅうと抓られると、最初よりも慣れていたのかすぐに痛みから快楽へと変換された。全てが鈍く、心地好い。何もかもが性感帯だ。すちゅ…ずぶっ、じゅぶぶっ…グチュ…じゅぼっじゅぼっ…！ 嬌声を上げて息を乱しながら、結合部から生まれる気持ち良さに喘ぐだけだ。

「こまえた、…ああつ、こまえた、…好きだ、好き…。誰にも、渡さない…！」

「ふああッ、んっんっんううう…！ あふっ、あひいいいッ…ああんっ…あん…！」

「中で擦れて、…いいつ、いいぞ…、狛枝…！ もっと、もっと…」「んあッ、やつ、ひあああッ…もう止めて…、日向ク…おかしくなるう、あつアッ！」

妻まじい突き上げに気が狂いそうだ。結合部感覚を失ってしまった所為で、どこからどこまでが自分でどこからどこまでが日向なのかさえ分からない。確立した2人の人間であるはずなのに、今は1つの生き物としてそこに存在していた。ちゅぼちゅぼ…ずちゅっ…ぬちゅっ、にゅぶにゅぶ…！ 水音が一段と淫らに激しくなり、体だけでなく脳味噌まで犯されてしまう。

「あつ、んあッ…ひっ、おちんちんがあ、ボクのおしり…、日向クん、ああんっ、ひなた、くん…！」

「…はっ、…そうだな、お前の中に俺が入ってるんだ、狛枝…。ん

っ、ふ……」

日向は狈枝に覆い被さつて、きつく抱き締める。逃げようともかくも相手の力は強く、狈枝のような貧弱な体型の人間に振り切るなど出来なかつた。熱い息が顔にかかると思っていたら、噛みつくようにキスをされる。舌を絡めて歯列をなぞり、深く深く口付ける。日向は唇を離して狈枝の瞳を見つめては、吸い寄せられるように何度も何度もキスをした。

「っ……、もう限界だっ！ ああああ……、出したい、出す……お前の中に……全部、」

「ひっ……!? やっ、ダメ……っ、絶対……やだよ、精子……ッ出さないで……、ひあたクン、やあああっ！」

ラストスパートは近い。日向の腰の動きも速まり、ペニスがアナルをぐちやぐちやに掻き回した。感じるポイントを連続で突かれ、狈枝は涎を垂らしながら戦慄く。

「きもちいつ、狈枝っ、イクぞ！ イクッイクっ……アアっ、中に……狈枝の、中で……あつあつああアッ！」

「アッあんっあふうッ……なかはツらめらよ、っおちんちんっビクビク、させないでえ……！」

「無理だっ……、もう……出したい！ 俺……は、う……っ……っ!!」

「~~~~~ッ！ ううっ、うああああ……ひっ、おしり、熱い、のが……、あう……ふっ、ああ……」

ドクンと大きく日向のペニスが震え、遅れて体内にじんわりと熱が広がった。狈枝はビクビクと仰け反つて、注ぎ込まれた熱に感じ

入る。日向に精液を出されたのだ。悲壯感を胸いっぱい感じ、狈枝はくったりとその場に体を投げ出した。

「ああ……は……、ははっ、狈枝……す……く、気持ち良かったぞ。幸せ過ぎて、泣きそうだ……」

「………」
「くっ、抜こうにも締め付けてきて……、中々抜けないな。……っつと、抜けた……」

ずるりと楔が抜けて、空洞になった狈枝のアナルはヒクヒクと収縮を繰り返す。ローションと精子が混ざった液体が尻を垂れていくのが肌を通して伝わってきた。

「………」

「狈枝は出してないのか。……ああ、疲れたんだよな。後始末は全部俺がやるから、寝ていいぞ」

頭をよしよしと撫でてから、日向は部屋の外に行つてしまった。しんと静まり返つた室内を狈枝は視線だけ動かして見回した。日向との生活の名残は何1つとして変わっていない。ダイニングの近くに脚の高いテーブルが見える。今自分がいる場所はリビングのカーパーツの上で、すぐ傍には2人掛けのソファとローテーブルが置いてあった。暇があればこのソファに座り、日向と何気ない話に耽つたものだ。

「う……、ふっ………うう……ひっ……く……ん……っ」

同じ場所であるはずなのに、何もかもが違つて見える。幸せを育んできたこの部屋が、たつた今悪夢に侵されて絶望の象徴へと生ま

れ変わった。泣き過ぎてスキンと頭が痛み、狈枝は横向きになって目を閉じた。考えるのは止めよう…。今は静かに心を落ち着けるべきなのだ。

「狈枝…？ 眠ったのか？」

ギシリとフローリングが軋む音がし、日向が戻ってきた。目を瞑っているのを見えないが、気配から何となく狈枝の傍らに膝を突いているのが分かった。アナルに指を突っ込まれ中の精液を掻き出された後に、じゅわっとした熱い何かが口元に押し当てられる。お湯で濡らしたタオルで清めてくれているようだった。

「んっ…んう…」

「…狈枝？ 初めてなのに流石に激しくし過ぎたか…」

独り言を漏らしながら日向は狈枝の体の隅々までタオルで綺麗にしていった。拭いた後のスツとした清涼感に狈枝は少しだけ心穏やかになる。気になる箇所は全て拭けたのか、日向は「ふう…」と一息吐いた。

「もう、戻れないんだよな…」

「……………」

「狈枝、ごめん。俺は…どうしても、お前が欲しいんだ…」

狈枝の体がビクリと小さく震えたのに気付かず、日向は指先でそつと狈枝の頬を撫でた。そしてちゅつと触れるだけの口付けが落とされる。温かな体温が離れ、日向が去っていく。

「日向くん……………」

狈枝は目を開き、ぽつりと想い人の名を呟いた。もしかしたら、

狈枝の知っている彼はまた存在しているのかもしれない。自責の念に駆られ苦悩している日向が、まだどこかに残っているのなら自分が救ってあげたい。信じよう…。彼がこの過ちに気付き、悔いる日が来るまで彼と共にあり続けるのだ。今の自分に来るのは日向の傍にいたことだけ…。

「…ひなた、くん……………」

もう1度その名を口にした。安寧の日々を顧みながら、心の中で祈る。彼を信じたい。2人で過ごした時の彼も決して嘘ではなかった…。狈枝は決意を固め、唇を引き結んだ。希望が叶うまで待ち続ける。いつか、いつか…日向の心を凍てつかせる氷が溶け、彼と真に愛し合う日を夢見て…。狈枝はゆっくりと瞳を閉じた。

体を重ねた今日この日から、狈枝は日向の奴隷になった。

初めて会った時、彼は満開の桜の木の下にいた。

クセの強い柔らかそうな灰色の髪が春の温かな風にふんわりと揺れ、隠されていたその下にある白い顔貌を露わにする。優しげに弧を描く肩、清涼な緑灰色の瞳、抜けるような白い肌、桜と同じ淡い色の綺麗な唇。桜吹雪が舞う中佇むその男はこの世の者とは思えないくらい美しかった。本当に人間なのか、もしかしたら桜の精か何かではないか？ そんなありえない疑問を抱くほどに彼の美貌は浮世離れしていたのだ。あまりの美麗さに圧倒されて、その時は声を掛けることも出来なかった。

それ以来、日向はたまにその人物を大学の構内で見掛けた。すらりとしたモデルのような体躯はとにかく目立つた。視界の端に一瞬でも捉えれば、すぐに彼たと分かる。頭で考えるよりも先に視線は彼を追っていた。鉢合わせる度にその整った顔に見惚れ、足を止めてしまう。大教室の隅っこに座っている彼を見つけた時は胸が躍った。同じ学科だったのかと驚いた日向は、彼の横顔を後方から垣間見れる席をさり気なくキープした。

偶然にも何度か彼に接近する機会に恵まれたが、それでも話し掛ける勇氣はなかった。

———
// 狛枝 凪斗 //

名簿で彼の学番と名前を知り、密かに狛枝の姿を観察するだけの

日々を送る。そして気付いた。講義を受ける時も、教室移動する時も、食堂にいる時も…彼はいつも1人だった。彼自身は1人であることを苦痛と思わないようだ。涼しい顔で単独行動をしている。集団から外れることが恐ろしいとさえ感じる日向にとつて、それは何とも不可解であった。

ある時、教室棟の裏手で狛枝の姿をチラリと見た。向かい合うように話をしているのは同じ学年の少女だった。可愛らしい見た目と穏やかな性格、そしてほのぼのとした雰囲気とは裏腹に肉感的なスタイルを持った美少女で、男性陣からはかなり人気があった。その彼女が狛枝に対し、顔を赤くしながら恥ずかしそうに話をしている瞬時に理解した。彼女は狛枝を好きなのだ…。興味があつた日向は悪いと思いつつも、建屋の陰から2人の様子を窺った。

両手を胸の前で組んでおずおすと話す少女に対し、狛枝は微笑を浮かべ飄々としていた。やがて少女が頭を深々と下げると、彼は困ったように肩を竦めて一言三言何かを呟く。そして軽く手を振ると、バツが悪そうに去っていった。置き去りにされた彼女はその後で顔を覆った。どうやら振られたようだ。彼女の背中からひしひしと伝わる物哀しい空気が逃げないように、日向はその場を後にした。あんなに可愛い子を振るだなんて、彼は一体何を考えているのだろうか？ 彼女が可哀想ではないか。喋ったこともない相手に、日向は何故か沸々と怒りのようなものを感じた。

やがて季節は春から夏に変わり、長かった前期課程が終了した。夏休みに部活で大学を訪れた日向は学科掲示板の前を通った。いつ

もは休講のお知らせなどしかないその緑色に覚えのある写真が貼つてあり、日向は食い入るようにその記事を見つめた。とある分野のパイオニアともいえる教授にその頭脳を見初められ、研究チームに配属された驚異の1年生として、狛枝が紹介されていたのだ。そういうえば彼はほとんどの科目で上位を取るほどの優秀な生徒だった。

日向はしばし呆然とその記事を眺めていた。狛枝はいつもの微笑を顔に浮かべ、写真に納まつている。少しは嬉しそうな顔をすれば良いのにも思ふくらい感情が薄い。日向は唇を噛み締めた。彼にとつてはどうということはない日常の一コマなのだろうか。世界に名を馳せている教授の研究に携われるなんて、自分だったら光栄の極みで死んでしまふかもしれない。

「くそ……！」

日向は舌打ちして、その場から離れた。苛立ちから歩く足も速まる。胸がムカムカして焼けてしまふぞうだ。狛枝 凧斗は誰もが讚える器量を持ち、誰もが羨む美少女から告白され、誰もが敬う教授に認められている。それを手放して喜んでいればまた可愛いものを、彼はさも当然だという風に全てを受け取るのだ。悔しかった。密かに彼を気に掛けていた分、憎悪は底なしにどんどんと深くなった。直接恨みはないが、狛枝を貶めたい。ただの嫉妬だと分かっていた。それでも憤りを消すことが出来ない。

「……ぞうだ」

ふと思いついたアイデアに日向はビタリと足を止めた。浮かんだ

のは親から譲り受けた消費者金融会社を使ってどうにか出来ないかという浅はかな考えだった。借金を背負わせて、狛枝を貶める。あわよくば金の力で彼を手に入れられるかもしれない。彼の、絶望する顔が見たい。悲痛に塗れる狛枝の表情を想像するだけでぶるりと鳥肌が立った。背筋を走るおぞましくも魅惑的な心地に日向は口元を歪めながら、校舎を後にしたのだった。

日向の策略は面白いように上手くいった。興信所で調査した所、狛枝の親類に借金持ちの人間がいたのだ。ツマラナイと愚痴る双子の弟を喚けて、その親類を唆し、狛枝に見事借金を背負わせることに成功した。借金が判明した後で、狛枝の姿を見たが、意気消沈していても不幸せに見えた。今まで味わってきた幸せの代償だとほくそ笑みながら、日向はその儂げな表情に興奮を隠せない。

この時、初めて自分は彼をそういう目で見ていたのだと自覚した。狛枝は同性であったが、欲情の対象で考えても嫌悪感湧かなかつた。男臭さが皆無で体を重ねることを想像してみても苦にならないほどの麗人だったからだ。

数日が過ぎると、彼はスツキリとした面持ちで学校に現れた。どうやら借金返済の当てが出来たようだ。日向は静かに狛枝を見つめる。あれだけの絶望では足りないのだ。もっと重くもっと酷い絶望を、彼に与えたい。あの美しい生き物の翼を手折って、自分の元に引き摺り落とせたらどんなに良いか。日向はそれはかりを考えて、日々を過ごすようになった。

そしてあの夜、日向は偶然にも狛枝と言葉を交わすこととなった。濁流が轟々と唸る橋の上で、白んだシルエツトが飛び立とうとしているのを必死で捕まえたのだ。自殺を止めた相手が自分の心を奪ったあの狛枝だと気付いた時、日向は暗澹たる罪悪感に苛まれた。自分が背負わせた借金で心身ともにボロボロになり、彼は自ら命を絶とうとするほどに追い詰められている。ただただ憐れたった。

自分が矛盾している自覚はあった。狛枝の生活を献身的に支える一方で、彼を傷付け泣かせている。菩薩のように優しく狛枝を庇護する白い自分と、鬼のように醜い心で彼に理不尽な仕打ちをする黒い自分。相反する2つの意思はどちらも日向だ。狛枝が悲しくて泣くのも嬉しくて笑うのも、全ての理由が自分に繋がっている。誰よりも1番近くで、何も知らない狛枝の身も心も掌握することが快感となっていた。

*

日向は床に横たわる白い体を見下げた。とうとう想い人が自分のものになったのだ。感慨深く大きく息を吐き出して心を落ち着けると、日向は眠る狛枝の傍に跪いた。自身を抱き締めるように丸まって、天使は静かに眠っていた。泣き腫らした巨元は薄らと赤くなり、目尻から頬に掛けてはいくつも涙の跡が見受けられた。ふわふわの頭を撫でてから、時たましゃくり上げぶるぶると震えている体を夕

オルケツトで包んでやる。そしてグツと足腰に力を入れて持ち上げた。

「く……つ……、う、……」

華奢ではあるが、日向と同程度の身長を持つ大人の男だ。流石に軽々とはいかない。足を踏ん張りながら何とか寝室まで運び、スプリングの利いたベッドにそつと寝かしつける。つつと目から零れる涙を拭うと狛枝は小さく呻きながら寝返りを打った。

「んっ……んんう……」

「狛枝……」

愛しくもあり、憎くもある。色々な感情が混じり合い、日向自身もどう表現したら良いかさえ分からぬ。自分の世界は彼を中心として回っていると表現しても語弊はない。それくらい日向にとつて狛枝は大きな存在だった。狛枝が自殺を図ったあの橋の上で会う前から、ずつとずつと……彼だけを見ていたのだ。

「これであなたは……満足なんですか？」

「……」

背後から抑制のない声が聞こえて、日向は慌てて後ろを振り返った。陽が暮れたアパートの室内。ぼんやりとした薄暗がりの中、赤く何かが煌めく。目が慣れていく内に少しずつ黒い輪郭が浮き出てきた。そこに立っていたのは腰にまで届く艶やかな黒髪を背中に流した無表情な顔の男だった。真っ黒いスーツを身に纏っており、ただならぬオーラを醸し出している。声の主が誰なのか分かって、日向は安堵したように嘆息した。いつの間にか家の中に入ってきたのだ

ろ。

「音もなく入ってくるなよ。忍者か、お前は……」

双子の弟である、神座 出流 に怪訝そうに言葉投げながら、

日向は真正面から向き直った。顔立ちは鏡越しであるかのよう。二つなのだが、表情がないだけで全くの別人に見える。

「別に足音を消した覚えはありませんよ。あなたが彼ばかり見てるからです」

真紅の瞳がベッドの上で安らかに寝息を立てる狛枝を捉えた。神座から放たれる無機質な冷たさから狛枝を守るように日向は体を割り込ませる。日向の鋭い視線を物ともせず、神座は淡々と言葉を紡ぎ始めた。

「その男の借金は全てチャラになりました。しがらみから解放され、自由の身です。とは言うもののあなたに捕まっちゃいました」が

「…………。色々と悪かったな……。ありがとう、出流」

「どういたしました……。少しは退屈しになりましたから、僕も創には感謝しますよ」

ツマライが口癖で何を見せても「興味がありません」と一蹴する弟が協力してくれたのは予想外だった。彼がいてくれなかったら狛枝を手に入れることは出来なかっただろう。

「はあ……。僕が諸々の金融会社と交渉している間、創は男遊び……ですか」

「……うう、うるさいな！ 余計なお世話だっ」

「手に入ったら遊びは終わりなんですか？ 呆気ない結末です。ツ

マライ……」

さらに髪を払い、不服そうに呟く神座に日向は苦笑する。

「色々手伝ってもらって助かったよ。全部お前のお陰だ」

「感謝してるのなら少しは楽ませて下さいよ。彼の具合、良かったんでは？」

「……は？ 何言ってる」

「僕だって片棒を担いだんです。分け前として……その男の味見くら

いさせてくれても」

室内の空気が震撼するほどに声を張り上げてしまい、日向は慌てて自分の口を手で塞いだ。ちよつとやそつとじゃ表情を変えない神座が、日向の怒号に目を見開いて凝視してくる。狛枝が起きたかもしれない。日向は恐る恐るベッドの様子を窺うが、しつこい睡魔に捕らえられているのか狛枝に起きる気配はない。口籠りながら日向は神座を促し、寝室から出た。

神座にその提案をされた途端、一瞬にして頭に血が上った。怒髪天を突く。ありえなかった。例えその気がなくても、狛枝には指一本触れてほしくない。本当は姿すら誰にも見せたくないのだ。自分と狛枝だけの世界で時間を考えることなく永遠に徹眠んでいたい。それが日向の願いだっただ。

「……創、ケチです」

「ケチとかそういう問題じゃないぞ！ 絶対に、ダメだ……。例えお前でも……狛枝に手を出したら、俺は何をするか分からない……」

「そうですか。ツマラナイ冗談に本気になるなんて…あなたも相当ですよ、創」

「冗談かよー！」

思わず拳を握り締め、日向は文句を吐き出した。冗談と言われなくても、どっちにしろ気分は良くないのだが。

「……創がそれで満足なら、僕は何でも良いんですけどね」

「……」

「彼と精々楽しんで下さい。…それじゃ僕はこれで」

長い長い黒髪が暗闇に翻り、僅かな光を反射して鈍く光った。ギシギシとフローリングを踏んで、神座は玄関へと続く廊下の向こうに姿を消す。ガチャンと鉄扉の開閉音の後、辺りは再び静まり返った。日向はふらふらと寝室に戻り、ベッドの傍らにドツと腰掛ける。背後に眠る粕枝の寝息を聞きながら、思わず頭を抱えた。自分で選んだ道であるはずなのに、何も見えてない。手を繋いでいる粕枝だけが日向の抛り所であったが、彼が本当に粕枝 風斗であるのか、日向にはいまいち自信が持てなかった。

*

「粕枝、そろそろ起きろよ。…腹減らないか？」

ベッドに横たわったまま粕枝は昏々と眠り続けていた。かなり無理をさせたのだから疲れているに違いない。しかし夜の9時を回っているのに食事をさせないのは可哀想だ。そっと肩を揺さぶると、

粕枝は眉間に軽く皺を寄せてから、パチリと目を開ける。半開きの目でぼんやりと周囲を見渡していたが、日向に気付きハツとしたように起き上がった。

「あつ…、あ……っ！」

「おはよう。…体はどうだ？ 辛い所とかないか？」

唇から垂れた涎を指で拭いながら聞くと、粕枝は警戒しているのかタオルケツトで身を守るように体を包む。そして日向から距離を離すように後ずさった。ズキズキと胸を痛めつつ、日向は「粕枝」と名前を呼んだ。ベッドに乗り上げて縮こまってしまった彼の肩を抱く。

「お願いだ、逃げないでくれ…！ 粕枝」

「んっ、やあつ…！ 日向、クン…ふ、んうう…っ」

首をぶんぶんと振りながら顔を伏せる粕枝に、日向はどう声を掛けたら良いか分からずにいた。今まで辛い目に遭わしてきた分、優しくしたい。懺悔、償い、自己満足…様々な感情が入り混じって頭が混乱するが、とりあえず粕枝は空腹だろうと、ダイニングから作ったばかりのオムライスを持って来ることにした。

生来和食派な日向であったが、洋食が好きな粕枝のために普段作る料理のメニューを彼用にシフトしていた。幼い頃に両親を亡くし、家庭の味を知らない粕枝は日向の料理をいつも美味しいと言って、ニコニコと食べてくれた。中でもオムライスは彼のお気に入り、子供のように目をキラキラさせて口いっぱい頬張っていた。ほくほくと湯気が立ったオムライスをトレーに乗せて、粕枝のいる寝室

へと戻る。

「好きだろ？ オムライス。ちゃんとチーズ挟んであるぞ」

「……………」

オムライスという単語に漸く顔を上げた狈枝はポーっとこちらを見た。ふわんと香るケチャップとチキンライスの匂いにくんぐんと赤くなつた小鼻が動いている。日向はサイドテーブルにトレーを置き、スプーンでライスを一口掬う。そして「あーん」と声を掛けながら、狈枝の口元にスプーンを向けた。困惑したように日向の顔とスプーンを見比べる狈枝だったが、しばらくして大人しく口を開けてくれた。

「良い子だな、狈枝……」

「んんっ、んう……んく、んむっ……」

もぐもぐと口の中で噛んでから、狈枝はこくりとそれを飲み込んだ。タイミングを見計らつて日向もオムライスのスプーンを口に運ぶ。たまにグラスの水を飲ませてやりながら、何回もそれを繰り返した。まるで雛鳥に餌付けをしているようだ。やつと訪れたほのぼのとしたやりとりに心を和ませていると、オムライスを食べている狈枝の目からぼろりと1粒の涙が零れ落ちる。

「っ!? ……狈枝?」

「ひっく……んっ、う、ふう……すんっ……うっうっ……」

やがて両目から雫がいくつもいくつも流れ、狈枝はとうとう顔を覆つて泣き出した。日向はスプーンを放り出し、狈枝の顔を下から覗き込む。涙と鼻水と涎をぼたぼたと汚らしく垂らし、狈枝は泣き

じやくつていた。彼を傷付けた報いだと後悔するも、ぐしゃぐしゃの泣き顔に腰回りから熱く快感が滾る。日向は嚙り泣く狈枝を抱き寄せた。抵抗することなく日向の腕の中に収まつた狈枝は背中を手を回してぎゅっと抱き着いてくる。

「狈枝……、狈枝……。大丈夫、大丈夫だ……」

「んっ、はう……んんうッ、うっ、あ……っ、はあ……」

華奢な体をきつく抱き締めて、日向は雪のように白い背中をぼんぼんと軽く叩く。狈枝を穢したのは紛れもなく日向自身だが、この閉ざされた世界で孤独になつてしまった狈枝が纏る相手もまた日向だけだった。おかしい。どう考えても矛盾している。しかしここから逃げようとしても捕まるだけだといふことを狈枝は理解しているし、日向も彼を逃がすつもりはなかった。

「好きだよ、狈枝。お前がどんなに苦しくても、俺はずっと一緒にいるから」

涙で潤んだネフライトの瞳をパチパチと瞬かせて、狈枝は日向の顔をじつと見つめた。色素の薄い長い睫毛が涙で光っている。薄く開いた唇にはケチャップが付いていたが、日向は構わず口付けた。

「……………」
「……う、ふう、んあつ……っう……、ん、ちゅ……」

「……はあ、……………」

突然のキスに狈枝はビクンと体を大きく跳ねさせたが、日向に合わせるようにして顔の角度を変えて唇を重ねた。にゅりりと絡み合う舌はトマトの味がする。ああ……、この味が以前と変わらなかつたから、だから狈枝は泣いてしまったのか。日向は涙の理由に今更な

がら気付いた。猫枝にとつての大事な友情の象徴でもあったオムライス。壊してしまった思い出は元には戻せない。

猫枝の涙はキスをしている最中もぼろぼろと落ちていき、日向の頬を濡らした。

*

「落ち着いたか？ オムライス残ってるけどどうする？」
「……………。もう、いらぬい」

消沈した様子猫枝にそっぽを向かれてしまった。気まぐれな猫のような態度を取る猫枝に日向は忍び笑いを漏らす。一千万で買われ奴隷となったが、彼はすぐに主人様に懐くような性格の持ち主ではなかった。猫枝はあつさりして素直そうに見えて、頑固で自分の信条を決して曲げない。そういう彼だからこそ、服従させることに意味がある。

「よし、一緒に風呂入るぞ。もう沸かしてあるんだ」

「…は？ 一緒になって、ボクとキミとでってこと…？」

「他に誰がいるんだよ」

「……………」

猫枝は当たり前前の返答に口を閉ざした。黙ったまま動かない彼からタオルケットを奪おうとすると若干抵抗されたが、強く名前を呼ぶと渋々手を離してくれた。するりと落ちた布地の下から陶器のように滑らかでキメの細かい肌が見れる。ざわざわと興奮する自分を

抑えて、日向は手を差し出した。迷うように視線を泳がせた猫枝だったが、結局手を取ってよろよろと立ち上がる。情事の後で体が本調子ではないらしい。

「何で…、一緒に入るの？」

「俺がそうしたいからだよ。拒否したとしても無理に連れていくけどな」

脱衣所で服を脱ぎながらチラリと猫枝の方を見やる。その穢れなき白い肌に自分が付けた情欲の痕があるのは何とも倒錯的だ。赤い鬱血の痕は首筋から胸元、腹や足にまで散らばっていた。明るい蛍光灯の下でそれを見て、日向は改めて顔が熱くなる。猫枝を抱いたという痕跡がベッドから抜け出しても消えていないのだ。

「止めてよ…。じろじろ見ないで」

「ああ、悪い。行こう、猫枝」

棒立ちで動くことしない猫枝の背中を押して、2人で浴室に入った。日向はシャワーコックを捻って、出てきた湯を猫枝の肩からかけてやる。その時少しだけホツとしたように彼の表情が和らいだ。もわもわと白い湯気が立ち、2人の肌をしっとり濡らしていく。目を閉じて湯の熱さを感じ入っている横で日向はボディソープをたっぷり手に出した。猫枝の濡った肩に掌を当てて広げようとするとピクンと体が跳ねて、毛を逆立てた猫のように飛び退く。

「っ！ 日向くん！ ……い、今…ボクの、っ…」

「洗ってやるよ。中に出したのだからまだ残ってるだろ？」

「……………。また…、さっきみたいなこと、する？」

不安気に上目遣いで問い掛けをしてくる狛枝に日向は心が揺れた。体が慣れない内は無理をさせずに、少しずつ彼を自分色に染めていこう。だから一緒に風呂は入っても我慢はしようと思っていた。しかし湯気の霧に見え隠れする彼の扇情的な裸身を前に、体中の血が沸騰しドクドクと大量の血流を本能へと運ぶ。

「狛枝、ちよつとだけ。挿れないから、な？」

「やあ…、待つて…！ ひあたクン…あつ…、ンンツ…はあ…腕を軽く引つ張ると狛枝の体は簡単に日向に抱き込まれた。重ね合った体は湯の熱でほんのりと温かい。男にしては柔らかくつるつるとした肌の感触に日向は思わず溜息を漏らした。肩につけたポディーンソープは掌だけでは十分に泡立たず、ぬるぬると肌を滑るだけだ。鎖骨から胸へと手を動かし、自分の胸板と擦り合わせるように体を揺らす。突起した互いの乳首が触れ合うと、狛枝は眉を寄せて切なげに喘いだ。

「あん…ツ、ふ、…んううう…、ダメ…、んつ…そこは…、」

「感じるのか…？ ああ、勃つてきてるな…狛枝の」

日向が下半身を擦り付けると、さつきまで萎えていた狛枝のペニスに段々と膨らんで押し返してきた。一旦体を離して今度はポディーンソープを狛枝の腹や太腿に塗りたい。目に涙を浮かべはあはあと息の荒い彼を擁し、ぐちゅぐちゅと滑り気のある体をピッタリと合わせる。

「はあ…、あ、んんつ…んう、ふあつ…おちんち、んう…」

「俺、もつと見たい…。狛枝が気持ち良くなつてると…。見せて

くれよ」

「…ひい、ンツ…ああ…や、やらよ、…見せたく、ない…アアッ」

狛枝は快感に蕩けた顔をしながらも必死に首を振った。逃げようとして僅かにもがいたが、既に腰砕けになっているようで大した力が入らないようだ。日向は手を肩甲骨から背中中に回しながら、下へ下へと這わせていく。すんなりと括れた細い腰に到達する頃には、狛枝はしな垂れかかるようにこちらへ体を倒してきた。

「これからずつと一緒に暮らすんだからさ、お互いを知るのは大事なことだろ？」

「う…、んあ…、あつアツ、んん…ふ…、だいい、じ…？」

「そうだぞ。お前のことは全部知りたいし、お前にも俺のこと…知つてほしい」

「はあ、は…、ん、…ボクの、こと…、大事？」

縦るようにネフライトの瞳で見つめてきた狛枝に、返事の代わりに桜色の薄い唇にキスをする。狛枝が誰かに傷付けられるのは耐えられなかった。しかし自己中心的な想いから日向は狛枝を痛めつけている。そして傷だらけになり泣いている彼を慰めて、心から癒し尽くすのだ。抱え込んだ歪みに自嘲しながら、日向は狛枝の尻たぶを揉んだ。

「んひつ…、おしり…んつう、はあんツ…、ふう、…あつ」

「…ツ狛枝 は…つ、こまえた…」

弾力はいまよりなく硬い男の尻であるが、狛枝のものと思うと興奮する。指を双山の間に滑り込ませて、きゅつと皺の寄った蕾を優し

く撫でた。その途端、狛枝の体がビクビクと跳ねる。

「アンっ…、もう…やめて、よお…！ あ、んあッ…ひああっ…」

「中も洗うって言ったじゃないか。ほら、力抜けよ」

「んっ、んうううう…、ひな…つふあ、…アンっ、ひっ…ひ、んんっ」

浸潤の腫で舌つ足らずに言い返す姿が堪らない。きつく閉ざされた秘密の入り口をくりくりと擦つてやると、ふにやふにやと解れて日向の指を食べようと吸い付いてくる。先程の行為でかなり拡張したと思っていたが、未だにそこは狭苦しい。しかし内壁は奥へ奥へと指を飲み込もうとし、日向が誘われるがまま中指を突き立てると、ぐぶぶ…と引つ掛かりもなく沈み込んだ。

「お前の中、あつたかくて…気持ち良いな。ん…、最高だ…！」

「ううう…っ…んんっ…アッ…ああ、ん…はあ、はっ…！」

狛枝は開いた唇からだらしがなく涎を垂らしている。きゅつきゅと心地好く締め付けてくるアナルにすぐにでも突っ込みたい衝動に駆られるが、自分を抑えて指をくの字に曲げた。そもそも中にまだ放った精子が残っている可能性があるから、今体を洗っているのだ。目的を見失い欲望のままに狛枝を犯してしまつたら、きつと抱き壊してしまう。

「う、んあ…変…、また…へんなの…っ、やあ…！ 指い…」

「我慢してくれ…。ああ、やっぱり中…濡れてるぞ。奥の奥まで…注いだからな」

「ひっ、ひい…！ んふっ…あ、ああん、じゅぼじゅぼ…しあいで

え…」

中指と薬指で穴を抜げて抜き差しをすると、奥からとろりとした精液が零れてきた。ほとんどは先に掻き出していたから少量のはずだが、ねっとりとした纏わりつく感触がいつまでも指に残っている。

「ああ…っ、あひい…！ んいッ、アっんあ…ああ…、出てきて、るよお…」

「そうだな。1回洗い流すか…。狛枝、座つてくれ」

泣きじゃくる狛枝を椅子に座らせて、秘部が見えるように脚を広げさせる。股間を日向に見せつけるような厭らしいポーズだが、アナルから生まれる気持ち良さにとっても良くなっているのか恥ずかしがる様子もない。シャワーで入り口付近を軽く洗つてから、日向は再びボディーソープの助けを借りて中へと指を侵入させた。

「ああん…っ、あ、ああ…中、ダメ…ダメえ…、んうううう…ッ！」

「もうちよつとだから、狛枝…」

真っ白になるほど唇を噛みしめ、頭を左右に振り乱しながら狛枝は悶えている。指を引き抜くと糸のように精液が伝ってきた。広げたアナルをシャワーで洗っていると、中に湯が溜まってしまったのか、狛枝がアナルをヒクヒクとさせる度にびゅっびゅと小さな飛沫が飛ぶ。狛枝のペニスも勃起した状態を保ったまま、天に向かってそそり立っていた。この短い間に後ろで感じるようになってしまったらしい。

「ああッあつ…そこっ、そこ…んああつ、出ちや…、ひぐっ…んんっ」

「!? 出るのか、狛枝…! 気持ち良いんだなっ?」

「…ッあはあ、きもち、い…っん、ンツ…はあはあ…ボク、あっ…うあッ」

狛枝が初めて自ら「気持ち良い」と口にした。そのことに日向は驚きを隠せなかった。周囲と二線を引き、高いプライドを保ち続けていた彼が、硬質な雰囲気そのままに淡白で流されない彼が、性的快楽に屈服しているのだ。雄の征服欲を刺激された日向は手の動きを速める。じゅぷっ…ぢゅくん…ふちゅっくちゅ…にゅぷにゅぷ…。虫猿な音が狛枝のアナルから発せられ、浴室に大きく反響する。日向の指に合わせて、狛枝の腰が小刻みに揺れ出した。

「ん…ああッ、おしり…感じて、はあっ…はああ…っん、ひうう…!」

「狛枝、そのまま…イっていいから」

「あんっアンっ…出るよお…! イく…、イっちやう、…ん、んっ、…あつああ…あああッ!」

切羽詰まった嬌声を響かせて、狛枝は、ペニスからびゅくびゅくと勢いよく射精した。大量の白濁が腹に飛び散る。吐精した余韻でぶるぶると震える欲望にもそれはとろりと流れていった。前を弄ることなく後ろだけで射精するのは初めてだ。消え入りそうな呼吸音に顔を上げると、狛枝は体を浴室の壁に凭れて気絶している。ずるりと崩れ落ちる体を撫でて横から支えてやり、吐き出された精子を綺麗に湯で流した。

「折角、風呂沸かしたのにな…」

日向は頭を掻きながらぼつりと呟いた。浴槽には1度も浸かっ

てないままだ。この中に2人が入って、イチヤイチヤ楽しく過ごそうと思っていたのに…。機会を逃したことを悔いるが、気落ちした心はすぐに浮上した。まだまだ狛枝と過ごす時間はある。今日出来なかったことも明日またやれば良いのだ。薔薇色の未来に胸をわくわくと躍らせながら、日向は昏睡している狛枝を背負って浴室から出た。

*

「良いか? ちゃんと留守番してるんだぞ」

「…留守番、か。あはっ、何言ってるの? ボクは日向クンの

「奴隷」なんでしょ?」

ニヒルな笑いを浮かべ、狛枝は日向に冷たい視線を向けた。反抗的な態度に驚いて、日向は思わず玄関先で立ち止まる。美人という形容詞がピッタリな彼が柳眉を逆立てるととても迫力がある。人当たりが良い面しか知らなかった日向は、こんな表情を見せるのかとまじまじと睨み付ける彼の顔を見つめた。気たるげに髪を掻き上げた狛枝は虫でも見るような目付きでそれを返す。

「さっさと行ったら? 大学…遅刻するよ」

「昼飯用意しといたからちゃんと食えよ…じゃあ、行ってくるな」
「……………」

狛枝は不服そうな顔で自分の首に手をやった。そこにはレーザーの黒い頑丈な首輪が巻かれていて、中央からは鍵付きの錠前がぶら下

っている。狈枝のために準備した特注の品だ。ハードなディスプレイそれはほつそりとした狈枝の白い首筋と対比になるような雰囲気だ、日向はその出来栄えに大変満足していた。狈枝はしばらく錠前を弄っていたが、外れないことが分かると漸く手を離した。

「逃げようなんて思っなよ？ 出流は警察も押さえてるから」
「最低だね…」

舌打ちと共に吐き捨て、狈枝は背を向けてリビングへ戻っていく。ドアがパタンと閉じられたのを見てから、日向も玄関から外へ出る。アパートの階段をたんと降りてから、ポケットからスマートフォンを取り出した。暗証番号を素早く打ち込み、慣れた様子で画面をタップする。数秒の接続表示の後に、パッとディスプレイに現れたのは、先程リビングに引っ込んだ狈枝だ。部屋の上方——壁掛け時計の下側——に付けられた監視カメラの映像である。画面の中の狈枝はふらふらと部屋のソファに歩み寄り、そのままぼすんと倒れ込んだ。

「…可愛いな」

独り言になってしまったことは分かっていたが、そう呟かざるを得ない。ころんころんと怠惰にソファを転がる姿は普段の大人っぽさなど皆無で、小さな子供のような無邪気さと愛らしさに満ち溢れていた。やがて体を起こした彼は口をへの字に曲げて、首輪を両手で掴んで引っ張ろうとする。しかし案の定徒勞に終わったらしく、パタリとソファに寝転がる。

これ以上見ていたら、彼の可愛さで胸が締め付けられて窒息死す

る。心臓を上から押さえるようにして深呼吸してから、日向はスマホの電源を落とした。本当は大学など行きたくない。1日中狈枝と一緒に過こして構い倒したい。どうしてこれほどまでに彼は自分の心を捉えるのか…。理由を探しに深層心理に潜り込んででもロクな答えが見つからない。人間の理性ではなく、動物の本能のように彼を求めている。

日向は振り返って、アパートの窓を見上げた。離れたくない。狈枝を1人残して外に出たくない。後髪を引かれるような思いを振り切るように、日向は駅へと続く道に足を踏み出した。

「たたいまー。狈枝？ いるんだろ？」

部屋の奥に呼び掛けても返事はない。玄関の鍵が閉まっていたことから外に逃げ出していないなさそうだ。朝のご立腹がこの時間まで続いているのか。ドサツと荷物を玄関に下ろし、靴を脱いで「狈枝」と名前を呼びながらリビングのドアを開ける。カーテンは開きっぱなしで、雨戸も閉まっていない。朝と同じ状態だ。しかしそんなことは別にどうでも良い。家事を手伝わせるために狈枝を買った訳ではない。彼はただ傍にいてくれるだけでその役割を果たしている。

電気を点けるが、狈枝の姿はどこにも見当たらない。ダイニングテーブルに視線をやると、そこには日向が用意した昼食が置いてあった。皿の上が綺麗になくなっていて、そこから空腹に耐えきれず食べたらしい。ハンストなどされたらこちらが負けを認めるしかない

が、その可能性は頭から消しても大丈夫そうだ。

「狈枝…、こんなとこにいたのか」

ソファの反対側、死角になる場所で狈枝は眠っていた。すうすうと寝息を立てていて気持ち良さそうだ。しかしそのまま寝かせていたら風邪を引いてしまう。日向は悪いと思いつつも、狈枝の肩を揺り動かす。やがて「んんう…」と欠伸混じりに狈枝が目を鬱蒼と開いた。

「ん…っ、ひなた…クン？ おかえり、なさい…」

「!! …狈枝」

彼の口からぼろりと落ちた出迎への言葉に日向はハッとした。

徐々に覚醒してきた狈枝はぼんやりと辺りを見回していたが、日向の顔を見て慌てたように首を振る。

「ちがっ…違っんだ…！ キミと同居してた時の、クセで…つい、」

「…狈枝に『おかえり』って言ってもらえて、俺は嬉しいぞ」

「っんうううっ…！」

「晩飯はこれから作るから、ちよつと待ってろ」

日向は蹲っている狈枝を腕の中に収め、俯いているふわふわの頭になちゅつと口付けを送る。日向の肩口に額を乗せて大人しく抱かれていた狈枝だったが、数瞬の後に蚊の鳴くような声で「ダメ、なの…？」と問い掛けてきた。

「…ん？」

「ねえ…、今までと同じじゃダメなの？ 本当は戻れるものなら戻りたいって思ってるんですよ」

「………。俺が？ …友達のフリして、また仲良く同居生活をしようだって？ ははっ、あははははっ…。面白いな、それ」

必死な顔で語り掛ける想い人に日向は頭を抱えて笑い出した。狈枝は自分の価値を分かっている。日向がどれほどまでに自分に心酔しているか理解した上で、こんな交渉を持ちかけているのだ。一千万円のハンデを背負っているにも関わらず、こんな大口を叩けるのは大したものである。狈枝は頭が良い。日向の心に迷いが生じているのを鋭敏に察知し、自分から助け舟を出した。彼に嘘は通じない。

「っキミだって…ボクと暮らすの楽しそうにしてくれてたじゃないか…！ だったら、」

「なあ、狈枝…。そもそも前提が違っんだよ。俺は最初からお前を手に入れたくて近付いたんだ。同居は、その過程に過ぎない。確かにお前と暮らしてて幸せだったよ。でもそれは俺が望んだものじゃないんだ」

「っ…！ 日向クンが、望むものって…？」

「分かるだろ？ 俺がしたいのは、…(こういうこと)」

日向は狈枝の両手首を掴んで、床に押し倒した。じやら…と首に付けた錠前が軽い金属音を立てる。緑灰色の瞳が日向を真っ直ぐに射抜いていた。水晶のように美しいそれに日向はうっとりとし見惚れる。キスをするためにゆっくりと顔を近付けると、狈枝はすつと目を閉じた。双眸に細やかに生え揃った長い睫毛がより強調される。ふにふにとして柔らかい唇を挟むように口付けた。ぺろりと唇を舐

めると、狛枝は口を僅かに開いて舌を出しそれに応えてくれる。互いの湿った舌と唾液が絡み合う深いキスへと変わった。

「んっ…、あ…、んんう…、…、…、…、…、…、…、…、…、…、…」

「随分と積極的だな。…後でちゃんとしてやるよ」

「!! 別に、ボクはそんなつもりでっ」

キツと睨み付けて唇をこしこしと腕で乱暴に擦る狛枝に、日向は苦笑しながら体を起こした。

「今日は狛枝にプレゼントがあるんだ。お前のために選んできたから貰ってくれ」

「っ…どうせ下らないオモチャか何かでしょ?」

「俺にとっては下らなくないんだけどな。何にせよ、お前に拒否権はないから」

「……………」

狛枝は苦い顔付きで日向を見つめていた。"プレゼント"がセックスを匂わせたからか、白い頬が薄く色付いている。少しだけ腹が立った。冷静沉着で高潔なイメージしかない彼が、自分のような男に押し倒されて真つ赤な顔で涎を垂らしながら喘ぐ。要するに好きでもない相手に対しても、懐柔されれば簡単にそんな顔を見せる男なのだ。

日向は狛枝の特別になりたかった。しかし彼に振り向いてもらえない要素など何一つ持ち合わせていない。美しく優秀な彼と、地味で凡庸な自分。どう考えても釣り合わないだろう。平凡を絵に描いたような見た目と性格にはほとほと嫌気が差す。だから唯一の方法

である金に頼ったのだ。金に物を言わせて買い取ってしまった以上日向は一生狛枝の特別になれない。そのことも身に染みて分かっていた。

狛枝へのプレゼントは玄関に置いた荷物の中にある。それを身に着けた彼はとても厭らしく妖艶なのだろう。今すぐ見たかったが、楽しみは後に取っておくべきか…。そう考えた日向は「晩飯の後に渡すな」と狛枝に告げ、ダイニングへ向かった。

夕食の後に2人でシャワーに入った。この時ばかりは狛枝の首輪も外してやる。スッキリとした首元にホツと息を吐く狛枝を尻目に、日向は服を脱いで裸になった。同居生活で判明したことが、日向は基本的に人より湯浴みの時間が短い。対して狛枝は長風呂だ。居候の身であったたので水を無駄に出しっぱなしにすることはないが、スイッチを消した風呂の湯がぬるくなるまでずっと浸かっているくらいには長かった。軽く体を洗っただけで日向が「そろそろ出るぞ」と声を掛けると、狛枝は「え…?」といかにも拍子抜けした風に目を瞬かせる。

「ゆっくりで良いからな。プレゼントの準備して、待つてる…」

「……………」

プレゼントの語音に羞恥で顔を赤くする狛枝。日向はタオルで髪の毛を適当に拭き取って、脱衣所を後にした。廊下の先にある薄暗い玄関。そこに置きっぱなしの荷物から大きめの紙袋を引っぱり出した。ピリッと包装のガムテープを剥がして、中を覗き込むと想

像以上の品がそこに入っていた。

黒い上質な皮を鞣して作られた狛枝専用のレザーボンテージだ。元々首輪とセットで作られていたため、繫げられるように小さな金具が取り付けられている。胸の部分は大きく開いていて、所謂トップレスである。その下の腹部は透け透けのレースがあしらわれ、更にガーターも付いていた。バックスタイルはどうなっているのかと裏返して、日向は思わず眩暈がしてしまった。

「何だよ、これ……！」

明らかにフロントよりも布地が少ない。背中当たる部分にサテーンリボンの編み上げがあるくらいで、尻よりも高い位置で布が終わっているのだ。紙袋を探ると揃いのパンティとストッキングが出てきたが、これまた卑猥だった。パンティはレースが縁取られ可愛らしさを主張するものの、後ろ側は紐のみと言って良い状態で尻が丸見えだ。クロッチに切れ目があり、リボンを解くと中に収まったペニス。パンティを穿いたまま触れるようになっていた。

セクシー過ぎる衣装に頭を抱えながら、日向は袋をガサガサとひっくり返した。注文した店の店主が気を利かせてオマケしてくれたらしく、大人のオモチャがいくつか床に転がる。ギャグボール、こけし型のパイプ、アナルパール……etc。夜を連想させるものばかり目についてしまうが、そんな中1つだけ妖しい雰囲気のない物が紛れていた。薄ピンク色の可愛らしいガラスの小瓶。化粧品の種類だろうか？ 日向は吸い寄せられるようにそれを手に取った。パッケージに書いてある文字をそのままなぞる。

「……ええと、『誰でも素直でエッチなよいこになっちゃおうお薬』？ もしかして、これ……！」

日向はゴクリと唾を飲み込んだ。恐らく、これは……催淫剤だ。本当に効果があるかは分からないが、摂取した人間の性欲を高めるという薬だ。パッケージの裏には成分表があり、フェニルエチルアミン、シルデナフィル、エフェドリン……といったような馴染みのない横文字が記載されていた。本能的に危なそうだと判断した日向はそれを他のオモチャと共に紙袋に放り込もうとする。しかし寸での所手が止まった。

好きであるがゆえに、日向は狛枝に借金を背負わせ買い取った。こんな酷い仕打ちをした自分を狛枝は一生許さないし、愛さないだろう。狛枝の心は永遠に手に入らない。だったら、体だけでも虜にして掌握してしまえば良いのではないか？ 日向は震える手でパッケージから小瓶を取り出す。もうここまで来てしまえば、何をしても同じに思えた。

ベッドに横になって待っていると、寝室のドアがノックされる。「どうぞ」と声を掛けると、狛枝がそつとドアを開けて顔を出した。風呂上がりで体はほかほかと温まり、頬の血色も良い。狛枝は何も言わずともベッドに乗り上げて、日向の傍にちょこんと座る。「それで？ 今日はどうするつもり？」

「まずはプレゼントだな……。そのパジャマは脱いで、こっち着てくれないか？」

いつも寝間着にしている水色のパジャマを指し示してから、日向はベッド脇に置いてあったボンテージと首輪、ガーターベルト用のストッキングを手にとった。ベッドに並べられたそれを見た途端、

「これ、ボクが着るの…？ ……ふふっ、冗談…だよね？」
「冗談じゃない、本気だぞ。お前のサイズに合わせて作ってもらったんだ。絶対に似合うと思う…！」

日向は拳を握り締めて力説した。ボンテージを狼枝の体に、パジャマの上から合わせてみると、まるで謎えたかのようにピッタリであった。そのまま彼にボンテージを押し付けて「着てくれ」と畳み掛ける。狼枝はボンテージを持ち上げて表から裏から事細かに観察した後、ふう…と大きく肩を落とした。

「日向クンって、…変態だよね」

「なっ、何だつて良いだろ！」

「ちよつと…後ろ向いててくれる？ 着る…から…」

ボンテージをぎゅつと抱き締めた狼枝は、しつしと追い払うようなジェスチャーを日向にする。ドキドキしながら頷き、言われるがままに後ろを向いた。背後でベッドが軋む音と布擦れ音が響いている。早く見たい気持ちと日向は必死に戦った。

「ん？ ……んうううう、見えてるじゃないか…！」

狼枝の取り乱したような独り言に、日向は心の中で密かに「それに賛成だ！」と同意する。彼と体を重ねるまで童貞であったし、実際にアブノーマルなグッズを手にするのも初めてだったから気持ち

ちは分かる。ベッドから狼枝の重みが消えて、しばらくすると「もう、いいよ」と小さな声が背中に投げかけられた。振り返るとそこには蠱惑的なフェロモンを纏わせた艶やかなSM系美人が立っていた。恥ずかしさに耐えるように唇を噛み締めて俯き、日向とは絶対に視線を合わせようとしない。

まず目についたのは薄桃色の乳首だ。ピンと尖ったそれがミルク色の肌に2つ厭らしく点在しているのだ。特に何も考えず直に触れられるようにとオープンなデザインにしたのだが、結果は予想外だった。こんなにエロティックな印象を与えてくるなんてと日向は股間を痒かせる。レース素材の部分は蕙微の花が刺繍されており、隙間から狼枝の肌の白さが垣間見えてこれまたグツとくる。パンティはフロントがかなり窮屈そうに張っており、あの中に狼枝のペニスがぎちぎちに収まっているようだった。

「狼枝、後ろ…向いてくれ」

視線を動かさないまま日向が淡々と言い放つと、狼枝は緩慢な動きで後ろを向いた。バックスタイルは腰上にある編み上げ部分以外はほとんど布がない。すべすべの背中が剥き出しになっており、ボンテージで締め付けているため細い腰が一層目立った。パンティは紐のみなので尻たぶもすぐ揉める。触りたい…、舐めたい…。堰を切ったかのような強い性的衝動に背中を押され、日向はベッドから降り、ふらふらと狼枝に近付いた。

「あ…、んんっ…最悪だよ、こんな…変なの着る破目になるなんて…っ」

「似合うから良いじゃないか。…そうだ、首輪付けてなかったよな！」

日向はベッドに放つてあった黒い首輪を狼枝の首に巻いた。銀色の錠前を通し、カチリと錠を閉める。ボンテージの胸横から垂れ下がっているベルトを首輪に引っ掛けて、今度こそ完成だ。

「ああ、狼枝…！ 本当に綺麗だぞ。触りたい、触つていいか？」

「や、止めて…。日向くん…、ふあ…、だめ…、ア…、わ…っ！」

後ずさる狼枝にぐいぐいと体を押し付けて、ベッドにそのまま押し倒した。淡い柔らかい髪の毛がシャツに広がり、彼が使ったシャンプーの香りがふわんと鼻を霞める。眉をハの字にしてふるふると小刻みに震える様は、狼に睨まれた兎のようだ。雄の本能を刺激するオーラを自ら撒き散らしておいて、それに引っ掛かった雄がいざ食べようとすると「食べないで！」と瞳に涙を浮かべて懇願する。

「そんなのずるいだろ…！」

「え…？ 何言つて、…ひやあッ、あ、ああ…んっふあ…アんっ」

熱烈なキスを送りながら胸を乱暴に揉むと、狼枝はすぐに色気を含んだ喘ぎ声を口から漏らす。両側から肉を寄せるようにしながらマッサージをした。女の物ではない硬い男の胸板だが、僅かな肉の柔らかさみを見つただけで気分が高揚してくる。

「やあ…っ、ひあたくん…や、やめて…、んあ…あうう…ふ、ん」

まるで自分が悪者のように扱われているが、それは間違っている。そもそも厭らしい狼枝が悪いのだ。悪い、お前が悪い。性別を超えた美しさを持っているお前が悪い。色っぽく流し目をするお前が悪

い。綺麗に唇を吊り上げるお前が悪い。艶めかしく吐息を零すお前が悪い。掠れた声で名前を呼ぶお前が悪い。

全部、狼枝が悪い。

首輪が邪魔だが何とか首筋にちゅうと吸い付いて、所有の証を刻んだ。薄ら搔いた狼枝の汗をペロペロと舐めとりながら、白い胸板にしやぶりつく。ぼちちりとした突起を指でピンと弾くと、狼枝は「んううう…」とくぐもった声を上げた。どうやら感じるらしい。可愛らしい薄桃色を今度はきゅっと摘まんで引っ張ると、狼枝は声を引き擧げながら背中を大きく撓らせる。

「いつ、あああああ…ッ!? …や、やらあ…、はあはあ…、乳首

い…」

「胸…ちゃんと感じるようになったな。1日しか経つてないのに…」

「だって、…キミが、んあ…はあ、いっぱい…ンツんう…、んああ…ッ」

「可愛い…、狼枝。えっちなお前も好きだぞ。言っただろ？ お前の全部が見たいって…」

「はふう…アあん…っ、ボクの、…ひいいいッ…そこ、あつ、はああ…」

ボンテージに欠点があるとすれば狼枝の露出が限定されてしまふ所だろうか。その下にある柔肌には直接触れることが出来ない。

日向は少し残念に思いながらレース部分を撫でて、パンティの上から股間に優しく手を置いた。パンパンに膨らんで、レザーを下から押し上げているはしたない男の象徴、与えられる刺激にピクピクと小さく反応している。局部に触れられた狼枝は「あつ…」と呟きを漏らし、意外そうに日向の顔を見やった。

「日向ク、ン…？ はあはあ…んう…、も、おちんちん…触るの？」
「…何だよ、もつと乳首弄つてほしかったのか？」

「ン、ふう…そうじゃ、ない…よつ、キミと一緒には、しないで…、んっんっ」

歯向かうようなセリフとは裏腹に語尾はとろとろに蕩け切っている。ペニスをやわやわと揉んでやると潤んだ瞳からはらりと涙が零れ落ちた。日向を迎え入れるように足が徐々に開かれる。気持ち良さに無意識に体が動いてしまうほどに彼は性的快楽に弱くなっていた。催淫剤はもしかしたら必要ないのかもしれない。ポケットの中の小瓶の存在を意識しながら、日向はクロツチにあるリボンの結び目をしゅるりと解いた。

「ああ…!? な、に…？!! …そこって開くの？」
「苦しかっただろ？ 今楽にしてやるからな」

緩められたリボンの間から硬く屹立したペニスがぐいぐい押しつけてきている。拘束を振り切つて逃げ出そうとしているそれから絡みついてリボンを外してやると、解放感からか嬉しそうにパンティの外へと飛び出してきた。根元で押し込められていた双球もクロツチから引き出す。ひくついてる鈴口に指の腹を当てて円を描く

ように擦つてやると、先端からじわじわとカウパーを漏らした。

「あ、ふああ…は、ンッんう…、ひつひあ…ッはあん…」
「狼枝…、感じてるんだろ？ ほら、すごい濡れてるぞ」

「やつ…やらあ…、濡れてなんか、ないい…、っんひい…」

「くちゅくちゅいつてるの、聴こえてるか？ 俺はまだ舐めてないから、全部お前のだよ」

耳元で囁くと狼枝は否定したいのか嫌々をするように首を横に振つた。鈴口が開閉する度にドクドクと先走りながら後から後から溢れ出る。日向はペニスを握つて、抜き始めた。先走りの滑りが助けとなり、動きはスムーズだ。わざと音が立つように指を合わせて、狼枝に卑猥な音を聴かせてやる。くちゅ…にゅちゅ…ちやくちやく…ぐちゅん…。耳を塞ごうとするのを制すと、彼はははふはふと上気した顔でこちらに反抗的な視線を向けた。

「こんなにエロい顔じゃ迫方ないな。本当は好きなクセに…」

「んあッ…ふつ、すき…じゃ、あんっアンっ…くっ…んうう…！」
感じているのに素直にならない狼枝に日向は苛ついてきた。どう見ても善がっているのを頑なに認めようとしなない。もつと快楽に従順になつてくれれば、可愛がる方法も増えるというのに。日向はポケットの上から催淫剤の小瓶を確かめた。やはり使おう。信憑性を確認するためにもその内使おうと思つていたので。もしかしたら大効果がはないのかもしれない。ネットで調べて出てくるものは大体が外れらしいと風の噂に聞いたことがある。

「うっ伏せになつてくれ。後ろ、解すから」

「っ…ん、ああ…、ひあたクンの、おちんちん…ひつつ、ボクに、いれ…るの?」

「ああ。たくさん濡らさないと痛いからな。大丈夫、絶対気持ち良いから…」

すんすんと鼻を吸りながら泣く狛枝はとても憐れで加虐心がそそられる。目尻から流れる透明な筆に唇を寄せてちゅつと吸い取った日向は、狛枝の体を裏返して四つん這いにさせた。ぐずぐずと泣きながら狛枝は枕にしがみ付いている。ツンと白い尻が向けられている姿からは扇情的でむつとするような色気が醸し出されていた。双山の間にはくすんだ色の窄まりが慎ましくやかに存在している。1度挿入した所為で内側の肉が捲かれて、中央は瑞々しく鮮やかなピンク色をしていた。とても美味しそうだ。

「ひゃんっ! あ、あひひい…っ、やあ…何…ッ、ぬるぬる…して、ああんっ」

「んむむ…、はっは…!…、狛枝っ、んん…じゆる…、んはっ…こまえたあ」

「あっあうう…、はあ…舌…? ひあたクンが…ボクの、おひり…なめて…、アツ、んううううっ」

気が付いたら舐めていた。アナルの襞を丁寧になぞるとヒクヒクと恥ずかしがるように攣縮する。白い尻たぶを両側から挿んで、日向は夢中で舐め回した。ぐりぐりと舌で押すと、筋肉が解れてきたのかふにやふにやと柔らかくなる。弛緩して拡がった穴にちゅうちゅうと唾液を送り込んで、容赦なく舌を突き刺す。舌の先が些か中

に入ったようだ。

「ちゅ…、ん…、ははっ…舌が、入りそうだ…! ちゅぶつ、ちゅ…、んく」

「はあああ、ダメっダメえ…! きたな、い…よお、そんなと、あつアあん…っ」

狛枝は息を乱しつつも日向を振り払おうと腰を揺らす、がっちりとホールドされているため叶わない。日向は一旦顔を離し、ポケットからガラスの小瓶を取り出した。可愛らしい花を象った蓋を外すと噴射口がある。どうやらスプレータイプで性器に直接吹き付けるものらしい。狛枝のアナルはまだ十分に拡がってはいない。日向は自分の指先にシユッと催淫剤をスプレーして、しどに濡れた入り口から指を侵入させる。

「んっ! …ふう…、んうううう…、あはあんッ…、あつあつアアっ…んんっ」

「やっぱ後ろでも感じるようになったんだ」

きゆうきゆうと締め付けてくる感じが最初とは違う。侵入者を拒むように閉め出そうとしていた肉の動きが、ざわざわと奥へと誘うようなものに変化しているのだ。いくら強い薬を使おうと速攻では効果は出ない。これは狛枝の体が厭らしく変わったと言つても過言ではないだろう。一通り催淫剤を中へと塗りつけてから、今度はローションを掌に出す。くちゆりと先程よりも滑り気のある指が宛がわれ、狛枝はしくしく泣きながら「ひあたクン…」と訴えかける。「やだ、やだあ…! ひいん…っ、ボクのおしり、ひろげないで…」

「狛枝、我儘はダメだぞ。払けないと俺のチンコ入らないし」

「っ!! ……んううう、おちんちん…やめて、お願い…いれちゃ、やっらあ……!」

「…はあ、狛枝…。お前って…本当!」

日向は額に手を当てて、大きく息を吐いた。アブノーマルなボンテージ姿で処女のようなことを言い出す狛枝に心臓を貫かれる。しかしおらしくお願いされてもそれを受け入れることは出来ない。つるつるとした狛枝の尻を安心させるように撫でてから、薔薇のように赤く色付いたアナルにぬぶつと指を入れた。

「あはああああつ…、やつ、んあ…ひ、んっんっ、あ、あ、ああ…ッ」

「あれ? 前より柔らかいな。もう2本くらいいけそうだ」

「ひやうう…ッ! んっ、はあはあ…あつああ…んっ、ひあたクン…ふあ…」

ひよっとして催淫剤の効果が發揮されているのだろうか? 狛枝の様子を見ると、汗を掻きながら短く呼吸を繰り返している。真っ赤な顔でだらしなく涎を垂らし、ぎゅっつと抱いている枕には大きな染みが出来ていた。快樂の波に揉まれ自我を失いつつあるのか、口からは日向の名前と嬌声ばかりがあがっている。尻はゆらゆらと揺れ始めていて、アナルもぐちやぐちやに解れてきゆうきゆうと指を咥え込んでいた。

もう我慢出来ない。体が火照って仕方がなかった。熱を孕んだ下半身が解放を待ち侘びて、ドクドクと慟哭している。日向は狛枝の

尻から指を引き抜くと、スエットとパンツを脱いで床に放り投げた。ペニスはギンギンに勃起し、先走りがつつと糸を引きながらシートに落ちる。狛枝の腰を片手で押さえつけ、びたびたとペニスを蕩けた蕾に宛がった。

「はっ…は…、挿れるからなっ…お前の中に、」

「うああ…、やつ…んっ、おちんちん…やだ、っんあ…、ひあたクンの、あつ、ぐうううう…!」

「あつ…あ…! ……ん、狛枝…! ああ、こま…えだ…っ」

濡れそぼった狛枝のアナルにずちゅう…と淫音を立てながら、ペニスが中へと撃ち込まれる。うねうねと艶めかしく蠢く肉に揉まれて、繋がった場所がありえないくらいに気持ち良い。十分に解れているが締め付けが半端ではない。慎重にゆつくりと奥へとペニスを進める。ぬちぬちと穴が拡がり、痛みからか狛枝は悲鳴を上げた。

「痛あ…、んんっ…! んくっ…はあんッ、ひっひぎいいい…、あ、あ、ああッ」

「ヤバい…っ、気持ち良いぞ、狛枝あ! 中が、熱い…溶けそうだし…!」

「んあ、…おちんちんがあ、ボクの中に…ああ、はいっちや、入っちゃうよお…っ」

「やっつ奥まで…、ッん…、あつあああ…! いっ…? あつ…出るっ出るっ…!」

ペニスを全て収めた途端、日向の頭の中は。パツと白く弾け飛んだ。視界に火花がいくつも咲いた。カッとした熱が急激に股間に集まり、

日向はコントロール不能のまま猫枝の中へびゆくびゆくと射精する。荒波にダムが決壊したかのように勢いは止まらず、ドクンドクンとペニスで激しい脈動を繰り返す。

「あああ…ッ、ひ…、日向クンのが…中で、うああああ…、熱いの…ふ、んんう」

「~~~~っ！…あ、…こまえ、だ…ッ、く、はあ…あ、はッ…」

額から大量の汗が吹き出す。全身で息をしながら、日向は漸く周囲を見渡した。猫枝の腰を掴んでペニスを挿入したばかりだ。抽挿など一切していない。奥まで挿れた瞬間に射精してしまうことなど初めてだ。ざわざわと体中の毛が逆立ち、息を整えようにも落ち着かない。猫枝が心配そうに「日向クン…？」と声を掛けてきた。きゅつと同時に穴を締められ、日向は自分の状態を敏感に感じ取った。

「あ…、俺の…萎えて、ない…？」

どういうことだろうか。尚も硬いままの自身に驚きを隠せない。普通なら1度精を吐き出したら、回復までに多少は時間が掛かる。それなのに何故…？ その疑問の答えはずぐさま導き出された。寝室の床に転がったピンク色のガラスの小瓶が目に入り、合点がいった。恐らく催淫剤の効果だ。猫枝のアナルに塗った薬が結合した時に日向のペニスから摂取されてしまった。そう考えるのが1番現実的だ。

「んんう…、もう抜いてよ…！！ 日向クンのおちんちんで、ボクのおしり…拡がっちゃうじゃないか！！」

「バカ言うなよ。こゝで止める訳…ないだろー！」

「んひひひひいつ！ あ、あうう…、はああっ…いつい、ああんっあんっ」

ペニスをギリギリまで引き抜いて、再び最奥へと穿つ。ぶちゅぶちゅと穴からは泡立った白濁が漏れ、猫枝の白い尻へと伝った。腰を引き上げて、激しいピストンを開始する。アナルは放った精子により十分過ぎるほどに潤っており、抗することなくじゅぶじゅぶと抜き差しが出来るた。

「んあああッ、やつやあ…！ んっあ、はあ…ひな…んんう…ッ、あ、アッ」

「ああっ、こまえだ、きもちいつ…お前の、…すこいつ、…腰が、止まらない…！」

「っ奥…、にい…、ひあたクンが、…苦しいよ、…ああ…んああっ、だ、めえ…ッ」

「はっ、はああ…！ 猫枝…っ！」

体を屈めて猫枝に密着させると、彼は僅かに唸り声を上げながら身動いだ。片手をベッドに突いて体を支え、もう片方の手で猫枝の細い腰を抱く。腹筋がピクピクと痙攣しているのが分かる。腰をカツカツと打ち付けながら、すすつと手を下方に動かす。熱く猛った猫枝の本能が指先に触れた。濡れた芯を根元からぎゅつと掴むと、猫枝は涙目でこちらを振り返る。

「やつ、触んないで…、ダメ…、あっああ…っ、…んあああッ」

「猫枝の…んんっ、チンコ勃ってる…。すこい…ガチガチだぞ」

「ひぐっ…！！ あっあっ、…ひあたクン…！！ あひっ、んひひ…」

「くっ……うっ……!」

ペニスを揉んでやるとアナルがぎゅううと力強く締まる。食い干
切られそうなくらい痛い。思わず顔を歪ませ、日向は手を離した。

「えっ…ひなたくん…、手、何で…?」

振り返った狛枝は悲しそうな瞳で日向を見つめる。快感を取り上
げられて可哀想だとは思うが、締め付けが痛過ぎてまともにピスト
ンが出来ない。背中に顔を埋めて「ごめん…」と呟き、日向は腰
を振り続ける。

狛枝はきつとペニスを弄られなくても射精出来るはずだ。前立腺
を刺激されていくことは、前を触られていくよりも数倍気持ち良
く癖になると本に書いてあった。これなら彼に最高の快楽を与えるこ
とが出来るとセックスに対して嫌悪感を持つてほしくない。自分だ
け気持ち良くなるなんて意味がない。狛枝と一緒に快感を分かち合
いたい。

どうしても狛枝の顔を見たくなくて、日向はずるりとペニスを引
き抜いた。力の抜けた狛枝の体をひっくり返し、足を持ち上げて肩
に担ぐ。アナルにペニスを押し当てて、グツと腰を進めると奥まで
ずぶぶと染み入った。ぐちゅっ…ばちゅんばちゅん…じゅぶっ…
くちゅん…。結合部から漏れる厭らしい音に、パンパンと肌を叩く
乾いた音が混じり合う。

「あつはあ…狛枝、キス…したい、なあ、こまえたあ…!」

「ン…あん、日向くん…、あつんうう…ちゅ、んふっ…はあっはっ」

体を倒すと狛枝もそれに応えるように顔を近づけてくれた。桜色

の唇にしゃぶりついて、性急に舌を絡める。ぬるりとした狛枝の柔
らかい舌が積極的に日向のそれに纏わりついて、ちゅうちゅうと吸
い付いてきた。狛枝の腕が甘えるように日向の首に巻き付けられる。
好きだから…、愛しているから…。きつと自分は頭がおかしいの
だ。いつそのこと世界が滅亡して、日向と狛枝の2人だけになっ
てしまえば、自分を愛してくれるんじゃないかと妄想ぎえした。自
分に振り向いてくれないのなら、せめて体だけでも繋ぎ止めておき
たい。自分なしじゃ生きていけない体にしてしまえば、狛枝が日向
から離れる心配はなくなる。

「あつあ、んああツ…ひい、あああ…っ、ひあたくん、ああん…ア
ツ…!」

「狛枝…、気持ち良いかっ!? 俺ので、気持ち良くなって…くれ
てるのか?」

「あふああツ…んあつアツ、はあつはああんツ…んっんう…、ひう
う…!」

「っ頼む…、答えてくれ! …はっ、はあつ…こまえた…ツ」

「…っ…っ、きもち、いい…、ふあツ…ひあたくん、きもちいよ…!」

「!? 狛枝…っ!」

快楽にもみくちゃにされた狛枝は息も絶え絶えにそう口にした。
刻々と彼は日向好みへと近づいている。そのことに日向も嬉しきで
胸がいつぱいになった。

「素直な狛枝…、俺、好きだぞ…! ずっと…そのまままでいてくれ
よ。なっ!」

「はっ…ああ…ッ、ンンッ、あ、ボク…ずつ、と…その、まま…？」
「そうだ。だって、捻くれてる狈枝なんて…俺を嫌ってる狈枝なんて…、必要ないだろ…」

「！！」

絡み合っていた舌がどちらからともなく離れ、日向と狈枝は間近で見つめ合った。狈枝の瞳はぐるぐる渦巻き、静かに静かに光を失っていく。絶望の色に染まっていくのを見て、日向の中の真っ黒な部分のがつそりと覚醒し、ぐちゃぐちゃに乱れる狈枝をよしよしと撫でた。

「狈枝、俺とずつと一緒にいてくれるよな？ あははっ、当たり前か…。だってお前は俺のものだもんな」

「ハアッ…んっ、あんっ…い、る…よ、ボク…ひあたクンと、んふっ…いっしょ…いるっ」

「ありがとう。絶対に離さないからな。んが…この先も続けば良い。…お前もそう思うだろ？ 狈枝…」

茫洋とした面持ちの狈枝に水を向けると、彼は涎を口の端から垂らしながらコクンと小さく頷いた。従順な彼はとても良いと思う。ちゅつと頬に軽く口付けると、狈枝は嬉しそうに薄らと顔を綻はせる。それはどこか影のある微笑みだった。

この瞬間、2人の関係はまたも歪に変貌した。

ガラガラと足元から崩れ落ちるイメージ。白い日向が頭を抱えて

喚き散らすも、黒い日向はよくやつたと褒め称える。どうして真っ

直ぐに彼を愛せないのだから？ これは自分が望んだ結果ではない。どんどんおかしな方向へと突き進んでいく。それを止める術を探そうにも、日向には見つけれられない。頭の中で滅茶苦茶に言葉が暴れるが、口から漏れるのは刺激に昂った喘ぎだけだった。

「んうう…、おしりのっ、おくに…日向クンのが…当たって、アッ…体…熱い…」

「…っ狈枝、俺…イきたい…ッ！ お前の中で、出したい…ああ…狈枝ッ！」

「ああッ、ひあたクン…ダメえ…っ、ボク、イっちゃうう…！ あっんう…おちんちんから、出ちゃ…ふあああッ！」

「く…、狈枝、狈枝…こまえ、だ…、あ、あ、ああ…くくッ、うっ」

ドクンと心臓の鼓動が体中に響き渡り、日向はどぶどぶと狈枝の体内に大量の熱を吐き出した。遅れて狈枝のペニスからもびゅびゅつと噴水のように精液が飛ぶ。2人とも荒く呼吸を繰り返しながら、言葉を交わす気力もなかった。ややあつてから日向は狈枝からペニスを抜いて、仰向けに彼の隣に倒れ込む。ボンテージの黒に飛び散った白濁を見て、満足気に笑った日向はそのまますうと目を閉じた。

外に出る時、スイッチの音が聴こえるような：、世界が切り替わ
るような感覚がする。

大学の最寄り駅に着いた日向は、改札を抜けた先に広がる青々と
した空をぼんやりと見上げた。爽やかな風が吹き、人が行き来して
いる往来はとても活気が溢れている。みんな今日という日を見据え
て、ひたむきに生きている。何の変哲もない穏やかな世界が広がっ
ていた。だがそれが日向にとって落ち着かない。確かにそこにある
もののなのに、透明な壁が間を隔てているかのように感覚が鈍いのだ。
現実味が薄いこんな騒がしい場所よりも、家に帰って粕枝と同じ部
屋で過ごす方が何倍も有意義だ。

「外に出る意味って…、あるのか？」

口を衝いて出た言葉にハツとしてぶんぶんと言を振る。何を言っ
ているのだろう、自分は。しかしどう誤魔化そうにも、外に出ると
いう当たり前のことがとても無駄なものに感じてしまう。日向は茫
然と左右に視線を走らせた。自分を追い越して、誰もが颯爽と前を
歩いていく。同級生らしき人物が続々と大学への往路についている
というのに、流れに乗ることが出来ない。全く足が動かないのだ。
日向も大学に行かなければならない。最近粕枝から離れることが
どうしても出来なくて、出席日数たつて足りてない。今日こそは…
とやつの思いで外に出たのだ。

「は…っ、はあ…、っ…く、」

体調は万全だというのに眩暈を起こしたかのように動悸が乱れ

る。日向は斜め掛けにしているショルダーバッグのベルトをぎゅつ
と掴んだ。視界がぐらりと軽く揺れるのを感じて、日向は壁際に体
を寄せる。彼が近くにいないことに言い知れない不安に掻き立てら
れた。ふんわりとした手触りの良い髪と曇った水晶の瞳、そしてし
なやかな白い体。どれをとっても猥褻がましく日向は完全に虜とな
っていた。

「なぎと…：、…風、斗…：。風斗、風斗、風斗…：」

ぶつぶつと口の中で呟く内に脳内が粕枝で埋め尽くされる。その
憂える表情が、掠れた声が、美しい体が…甘い蜜のように誘い、毒
のように蝕む。日向は、居ても立つても居られなくなり、改札にICカ
ードを翳した。ここにはいたくない。帰ろう、彼の元に…。スーパ
ーに寄って、彼の好きな物をたくさん買おう。足早にホームへの階
段を駆け下りる。粕枝さえ傍にいてくれれば、他はどうだって良い。
会いたい、逢いたい…。抱き締めたい。彼だけが自分の全てなのだ。
大学なんて行かなくて良い。この選択は正しいはずだ。トンと最後
の段を蹴つた直後、その日向の考えを肯定するかのごとく、ホーム
にタイミング良く電車が滑り込んできた。

粕枝を買い取ってから3ヶ月ほどが経過していた。一目惚れし
た日からずつと溜めに溜めていた欲望を発散するため、彼に時間を
使うことが最優先となつている。朝目覚めた時に愛しい粕枝が腕の
中に抱かれていると、至上の喜びを感じるのだ。夢想ではない実体
と温度を持った自分だけの粕枝 風斗。寝起きでぼんやりとする仕

草が可愛くて、時間を忘れて眺めるのは最早恒例行事だ。陽の光を浴びて艶やめく肢体にムラムラしてしまい、起き抜けにセックスすることもある。睡魔と日向の両方と戦うことは狼枝にとっては難しいらしく、腰を持ち上げて後ろから突っ込んででも開けっ放しの口から嘔ぎが漏れるだけで一言も文句は言われなかった。

食事を食べさせるのも日向の手で行っている。椅子にお行儀良く座った狼枝の口に千切ったパンを近付けてやると、素直に口を開いて食べてくれるのだ。「風斗は良い子だな、可愛いな」と頭を撫でると狼枝はほんのりと頬を染めて微笑む。食後は膝に頭を乗せて歯を磨いてやり、爪も全て日向が指を一本ずつ丁寧に切り、鍔を掛けて整える。もちろん風呂も一緒に入り、出た後は体を拭いてやり、良い香りのするボディミルクを体に擦り込む。

休日は抱き合って過ごすのが、ストレスになつたら困るので1人にする時間も作るようにはしている。しかし監視カメラを設置しているのだから、どちらにしろ狼枝にプライベートは存在しなかった。3ヶ月経つても全く飽きないし、寧ろどんどんのめり込んでいっている。日向は狼枝を構うことに夢中になってしまい、勉強に全く手がつかなくなった。大学もサボるようになった。友達からの連絡も訪問もシャットアウトして、狼枝と2人きりで過ごした。

このままではいけないとは頭のどこかでは認識していたが、日向にはどうすることも出来なかった。どこまでも彼と一緒に落ちていく。2人である空間は外の世界から切り離されて、ずぶずぶと底なし沼へと沈む。狼枝はどんどん人間らしさを失っていった。仲良

く同居していた頃の精彩さは消え失せ、言葉もロクに話さず、呼び掛けた時の反応も頗る鈍い。ただ日向の言うことだけはきちんと聞いてくれた。

「ただいま…」

アパートに帰ってきた日向は薄暗がりに声を投げた。音はしない。もしかして寝ているのだろうか？首を傾げつつ、靴を脱いでいると廊下の奥からガタンと物音がした。ああ、いるんだ。愛しい奴隷のお出迎えを待とうと、日向はその場で立ち止まった。

カタン…、チャリ…、ペタペタ…、コツコツ…、チャリ、チャリ…、ペタペタ…

金属がぶつかる音に混じり、廊下を踏むような音が聞こえた。大した時間も掛からず、日向の前に四つん這いで這う何かが姿を現す。日向は彼を見て、ふわりと微笑んだ。一千万を掛けて手に入れた大事な奴隷。日向の宝物だ。

白いふわふわとした手触りの良さそうな髪。男であることが不思議であるくらい美しく整った顔立ちだったが、その唇は真っ赤なギヤグボールを啞えている。滑らかな乳白色の体は厭らしい造詣の黒いレザーボンテージを纏い、剥き出しになった白い尻からはアナルパールパールの鮮やかな球がいくつ飛び出していた。彼は日向の奴隷だ。立つて歩くことは許していない。

「ただいま、風斗…。良い子にしていたか？」

日向の最愛の奴隷である狛枝は、掛けられた言葉に嬉しそうに表情を緩めた。早歩きで廊下を進み、「主人様の帰りを喜ぶ大の如く、日向へと抱き着く。当然膝を突いたまま。涎でびちゃびちゃのギャグボールを押し付けてくる狛枝に、日向は待ったを掛けてそれを外してやった。自由になった唇で狛枝は日向のそれに吸いつく。

「ははっ、風斗。くすぐったいって！ バカ、、そんなに舐めるなよ！」

「あつ……ああ…、ん、んっ…ふっ……んちゅ…、はあ、はあ…」
ペロペロと舐め回す狛枝を日向は背中を撫でながら受け入れる。間近で見ても、狛枝の体は美しかった。奴隷といえば、主人に酷く当たられて、痩せぎすになっているイメージだ。しかし狛枝は隅々まで手入れがされており、全身に綺麗に肉がついていた。汗臭くもなく、甘いミルクのようなとても良い匂いがする。キスを強請る度に乳首についた銀色のピアスがキラリと光り、目についたそれを擦るように触れてやるとパンティの下のペニスがピクピクと震えた。「もう満足したか？ 腹減っただろ？ ご飯にしような！」

「んあ…あ…：…ん、ん…：…んんっん…：…はう…、あつ…」
唇を戦慄かせながら狛枝は首を振った。日向が首を傾けていると、狛枝は日向の黒いズボンの股間部分に顔を埋める。そして布の上から舌を這わせて、ピチャピチャと舐め始めた。淫猥かつ可愛らしいおねだりにカッと日向の股間が熱くなる。やはり大学なんて行かなくて良かったと、目の前の奴隷の頭を撫でながら自身の行動に納得する。こんなに可愛い狛枝を1人置いてなんて行ける訳がない。

「…：…そっか。したいのか。分かったよ、風斗。俺もお前のこと、いっぱい愛したい…」

「んふう…：…ん…：…うあ…：…っ、あ…：…、ああ…：…ふっ……」

涙で潤んだ灰色の瞳は日向が渴望して堪らない絶望の色に染まっている。優しく頬にキスを落とすと、日向は寝室へと繋がるドアへと向かった。狛枝も大人しく四つん這いのまま日向の後をついてきた。ドアを開けて先に狛枝を入れてやると、彼ははいそいそとベッドによじ登る。そして仰向けに寝転がり、日向に対して服従するのごとく脚を開いた。

「お前は本当に良い子だな…」

「…：…うん、つふ、う…：…」

うるうるとした瞳を向けて媚びる姿は日向好みの完璧な奴隷だ。首筋から鎖骨の剥き出しの白い肌と胸元に浮かんた薄桃色の乳首のコントラストがとても厭らしい。銀色のピアスも小さいながらもさり気なく存在感を主張している。シミ1つない肌は指先で触れるとさらさらとしていて引つ掛かりもない滑らかさだ。ピクンと狛枝の体が僅かに反応して揺れる。頬を染めて感じ入るように目を閉じた彼は胸いっぱい息を吸い、そして吐き出した。

最初の頃とは比べ物にならないくらい狛枝は感じやすくなっている。淡白そうな見た目からは想像がつかないが、体は快楽に食欲でちよつとした接触でもぶわりと肌が粟立つのだ。焦らすように腹部を撫で回していると、早くして…と欲情を孕んだ熱視線にじりじりと焦がされる。急かされた日向はネクタイを緩めながらベッドに

膝を突いた。ギシリとスプリングが無機質に音を立て、待ち侘びたように狼枝が薄く唇を開く。涎でしつとりと濡れた桜色に日向が口付ける、はあはあと息が荒げながら夢中で吸い付いてきた。

「んっ、はあ…、ふあ…っ、んんう…」

真つ白なベッドシートに奴隷を縫い止めて、優しい手付きで体を愛撫していく。溜息のような喘ぎを漏らしながら、狼枝はビクビクと体を跳ねさせた。触れる内にポンテージの上からでは物足りなくなつて、胸元にあるファスナーをジジツと下げていく。すると黒い布の下から目の覚めるような乳白色が現れた。赤黒いキスマークや歯形がいくつも刻まれており、その1つ1つが日向が狼枝を所有している証であつた。絶対に離さない。手に入れたからには命が尽きるまで彼を庇護し、愛していく。その決心は固かつた。痕が消えてしまわないように、果てしない独占欲から日向は何度も色を重ねる。

「なあ、俺にもつけてくれよ…。俺は風斗のものだつて、お前自身が教えてくれ」

「……ん、あう…？　んっう…ッ、んあ…ふ、ふう…、っ」

腕を引つ張り、狼枝を起こしてやる。代わりに日向が寝転び、体勢が逆転した。狼枝の頭を抱えて胸板に近付けると、彼は目を細めて生温かい舌をねつとりと這わせる。日向を味わうように胸元を嚙り、そして乳首のすぐ横をじゅううう…ときつく吸い上げた。これで良いか？とも言うように日向を見据えてことりと首を傾げる。心臓の上につけられた赤に日向はふつと微笑み、狼枝の括れた腰を

掴んで引き寄せた。

「ありがとぅ、風斗。足りないよな…。もつとシよう。もつと、もつと…」

脇から腰へと手を滑らせて、パンティの紐に指を引つ掛けた。すつと下へ脱がしながら、すべすべの尻を何度も撫でて揉みしだく中途半端に下ろしたパンティをそのままに、引き締まつた尻の中央へとじわじわ指を進めた。コツンと硬質の何かに爪の先がぶつかる。アナルパールだ。大小大ききの異なる艶やかな球が連なるその先端には、引き出すための輪がついている。日向は手探りで輪を探し出し、力を少し込めて徐に引つ張つた。

「んあああッ、あつ…：ひう…、アッ、あはあ…んんッ、んんう…！」

白い喉を仰げ反らせて、狼枝は苦しそうに呻く。しかし上気した頬は赤らんだままだ。球がくぶくぶとアナルの外へ出て行くのを指で確かめながら日向は尚もそれを引く。パールの排出に煽られて狼枝のペニスは勃起していることだろう。長い時間を掛けて、狼枝の体を隅から隅まで愛でて可愛がつてきた日向だからこそ分かる。しかし可哀想なことに互いの腹に挟まつた狼枝のペニスは、コツクリングを嵌めているお陰で射精には至らなかつた。

「ひいひい…、あつ、あ、はあん…ッ、んやああ…っ、ん、ふう」

小さな悲鳴を絶え間なく上げていた狼枝だつたが、アナルパールからの抵抗力が消え失せた途端にくたりと日向に身を預けてくる。濡れて光るアナルパールがシートにずるりと落ちた。

「…ああ、全部抜けたみたいだな。風斗、俺のが欲しいか？」

「!! んううう……! はあ、はあ…、あんつ、……ひ、あ…」

「リング取ってやるよ。ずつと我慢してたもんな。」褒美、だぞ」
「褒美と聞いた狛枝は日向の胸に顔を凭れて、礼を言うようにすりすりと頬擦りした。尻から抜けたアナルポールを道具用のトレーに置き、コックリングを外しにかかる。使っているコックリングはシリコンで作られたティアドロップ型の物で双球も締め付けるタイプだ。リングはいくつも試してみたが、これはラバーのような柔らかい着け心地で狛枝も気に入っている。色も透明でアダルトグッズには見えにくい。

股間に手を這わせると、ペニスも双球もはち切れんばかりにパンパンに膨らんでおり、朝からずつと狛枝が我慢しているのが手に取るように分かった。リングを取ってやるとすぐに鈴口がパクパクと開閉し、カウパーをトロトロと零し出す。「淫乱だな…」と日向が鼻で笑うと、粗相をしてしまった犬のように狛枝はしよんぼりとした顔をした。そんな所も可愛い。日向は興奮を抑え切れず、ズボンのベルトを緩めて中からペニスを取り出した。きゅつとしたピンク色のアナルに宛がうと、アナルポールを事前に飲み込んでいたからか、ずぶずぶと引つ掛かりもなく入っていく。

「んぐ…、ふ、あああ…つ、はつ、ひいん…、あ、あア…んつ」

「可愛い…、風斗。俺のもの、ずつと…ずうつと…。俺だけの…」

「アツ、んああ、あふう…ツ、やつ、いい、いい…よう…、ふああ…」

「好きだ、好きだよ。風斗…、ああ、愛してる」

引つ切り無しに続く嬌声に満足し、日向は笑った。その淫靡な穴を何度も何度も欲望で貫き、真っ白い絶頂へと導く。狛枝は足を日向の背中までクロスさせて、奥に欲しいと淫らに催促した。それに応えるように日向もガツンガツンと前立腺を穿つ。切なげに細められたネフライトが日向を見つめている。それだけで十分だった。狛枝は日向しか見ない。日向以外の誰も狛枝に触らない。望んでいた願いは叶った。

「名前、呼んでくれよ。風斗…。俺の名前、呼んで…」

「はあつ、はあ…、アツ…! はじめ…クン…、あんつ…あつあつあああッ!」

狛枝は頼めば日向の名前を呼んでくれる。それは「主人様としての命令だからだ。彼から進んで名前を呼ぶことは、気が付いた時にはなくなっていた。元々狛枝から話を切り出すことはこの主従生活を始めてからは皆無に等しかったので、いつから呼ばなくなったのかは定かではない。涙を散らしながら必死に喘いでいる狛枝は可愛くて愛しくて大事な存在だ。なのに心にひんやりと迫る虚しさは何なのだろうか。

「ああ…、きもちい、きもちいぞ、風斗…! 締め付けが、堪らない…ツ」

「ひい…つ、ひつ、アツ、はいめクン…、ボクも、ボクも…んうううつ!」

脳天を劈くような快感に体が蕩けるような錯覚を起す。全身の毛穴から汗が吹き出し、視界から狛枝以外の景色が消え失せて何も

考えられなくなる。絶頂を引き延ばそうと一点に凝縮した熱を留めていたが、とうとう限界を迎えたようだ。

「あつあああつ、風斗、なぎと……っ……イクツイく……うあ、イ……くっ!!」

「ひいああくッ、んあつ、いつ、んんうううッ、あつあつああッ、やつ、あああん……!」

ぬるぬると湿り気のある蜜壺に精子をびゅつと注ぎ込む。狛枝も艶やかな悲鳴を上げて、ペニスからドクンと大量の精を放った。内壁が痙攣する狛枝のアナルからペニスを引き抜くことなく、どつと日向は体の上に倒れ込む。涙目になった狛枝が天井を見つめたまま、息を短く吐き出していた。日向はむくりと起き上がり、再び緩やかに腰を突き動かす。1度だけでは終われないことは今までの行為から狛枝も重々に承知している。優しく名前を呼び掛けて、日向は狛枝の華奢な肩をそつと抱き寄せた。

「風斗、風斗……。ずつとこうしてたいな。お前が俺の傍にいてくれて、何でも言うつこと聞いてくれる今が……。最高に幸せだ……!」

—— 本当は？

ふと聞き覚えのある声が聞こえて、日向はハツとして顔を上げる。狛枝は従順に腕の中に抱き込まれており、口を開いた様子はない。この部屋には日向と狛枝の2人しかいない。『一体、誰の声なのか?』と首を傾げ、考える内にもう1度同じ声が頭に響く。カッ

と目を見開いて腰の動きを止めてしまった日向に、狛枝は心配そうに顔を寄せてペロペロと頬を舐めてきた。片手間にそれを受け入れながら、日向の心はざわざわと嵐の前兆のように落ち着かない。

—— 本当に、これで良いのか？

これは……。自分自身の声だ。奥底に眠る深淵から水面を揺らして、短い疑問が投げ掛けられている。じつと律動を待っている狛枝の顔を改めて見た。下がった眉に吊り気味の涼やかな目元と筋が通った品の良い鼻。そして桜色の可憐な唇。狛枝だ。どこからどう見ても狛枝の顔である。白く美しい日向の想い人で大事な宝物だ。しかし心の中からは警鐘を含んだ反論の音が幾度となく響く。

—— 違う、それは違うぞ……!

—— こんな狛枝じゃない、狛枝なんかじゃ……。ない。

ピリリとした鋭い痛みと共に、頭の中に無数の記憶がチラつく。外も暗い内に出掛けようとする狛枝を見送った朝の5時。大学に出てきた狛枝に学食で昼食を奢った昼の12時。金策に走った拳句、疲れた顔をして帰ってきた狛枝を迎えた深夜0時過ぎ。筋肉痛で起き上がれない狛枝にマッサージを施した休日の夕方3時。いつも狛枝は笑顔絶やさなかった。「大丈夫か?」と辛島芳を案じると、首を振って「キミがいるから、頑張れるんだ」と答える。

ざあつとその記憶が黒に塗り潰され、また違う狛枝が現れた。光を失った絶望した瞳でぎこちなく笑う。今となつては見慣れた奴隷としての彼だ。借金で苦しむこともない。誰かに生活を脅かされる心配もない。日向の言うことなら何でも言うことを聞かし、逆らったりもしない。幸せに祝福された天使である。

「……狛枝、こまえた……？　そうだよな、ここに……お前こそが、狛枝で……」

日向は弱々しく狛枝の存在を確かめるように触れた。耳元の髪から頬、唇、顎へ。喉仏を通つて、鎖骨を滑り、胸板へと手は置かれた。瞬きはするし、呼吸も聴こえるし、心臓も動いている。日向ほど熱くはないが、体もほんのりと温かい。こんなに近くにいるのに、不安を感じてしまうのは何故か？

「本当に彼が、狛枝風斗なら、あなたの目は生きながら腐ってしまった……と考えるのが妥当でしょうね」

背後から幽寂な声が響き、日向はギリリとして反射的に振り返つた。そう遠くない距離を隔てて、紅玉の煌めきが薄暗がりからこちらを射抜いている。髪も服装も黒で纏められているからか、能面のように無表情な顔がとて目立つ。神座 出流は寝室のドアの前に立ち尽くし、惘然とした眼差しを日向に向けていた。

「っ！？」 出流……！　いつの間に入ってきたんだよ！？」

慌ててアナルから埋め込んでいた楔を引き抜き、神座の視線から狛枝を守るようにタオルケットで包んでやる。そして無様に飛び出した。ペニスを手早くズボンの中へと押し込んだ。日向の動静に怒るで

もなく蔑むでもなく、神座は言葉を切り出す。

「さつきです。インターフォンも鳴らしましたが、出て来ないので鍵を勝手に開けました」

「鍵って、この間変えたばかりだぞ……？」

愛し合っている場面を見られたという怒りから日向の口調は自然と荒くなる。合鍵を所持している神座にもこの愛の巢を邪魔されたくなかつたので、日向は密かに鍵を付け替えていたのだが、才能に愛されていると評される彼の前では無駄に終わったようだ。ピッキングツールでも常に持ち歩いているのか？と訝しげに見やるも、「鍵開けの才能くらい持ってますから……」とさらりと返されてしまつてはぐうの音も出ない。

「……ところで創。僕が入ってくる音、何も聞こえなかつたんですか？」

「………。あ？　ああ……」

「かなり重症のようです。……まだ人形遊びに夢中なんですね」

「人形」という単語を強調して口にした神座は、呆れたように額に手を当てて溜息を漏らした。狛枝は神座の言葉にビクリと震え、唇を噛んで顔を伏せている。その寂寞たる表情に日向は狛枝の肩を抱き込んで、神座に敵意を込めた視線をぶつけた。狛枝を人形と愚弄するなど許しがたい。

「こいつは人形じゃない、……人間だ」

「……やはりあなたの目は腐ってますね。これのどこが人間なんですか？　確固たる意思を持たず、所有者の良いように動くだけなど……」

ただの生きた人形ですよ」

すつと指を狼枝に突き付けて、神座は侮辱の言葉次から次へと撃ち出す。狼枝へと風を切つて放たれる弾の延長線上に、日向は必死で躍り出た。絶対に狼枝を傷つけない。そんなことをする人間がいたとしたら、例え双子の弟であつても駆逐する。避けきれなかつた弾が肩や脇腹に食い込んで日向は激痛に呻くが、構えを緩めず神座に反論しようとする。

狼枝は日向にとつての絶望で希望なのだ。日向は確かに狼枝を手に入れることが出来た。だが買い取つてから大事に仕舞つていたその宝物が偽物であると神座は言う。一笑に付してしまえばそれまでののに、どうしても出来ない。神座の痛言が凶星たども言うのか？ 嘘だ、嘘だ…。頭を振り乱して、日向は腕の力だけで言刃を構えた。

「ちがつ、違つ…！ 狼枝はつ」

「覚えてないんですか？ あなたが人形にしたんですよ。他でもないあなたが…彼から自由を奪つて感情を失わせて、ツマライ綺麗な人形に仕立て上げたんですよ」

「止めろつ！！」

床を蹴つて勢いのままに斬りかかるも、神座にあつさりと躲されて日向は無様に倒れ込んだ。起き上がる事が出来ない日向の傍に狼枝が膝を突いて、身を案ずるように撫でて労わる。しかしそれも分り切つていたことだ。俺の言うことを聞け、俺を最優先に大事にしろ、俺を一切傷つけない。そう命じたからこそ狼枝は言う通り

に動く。神座の言葉に間違いはなかつた。自らが狼枝に全てを捨てさせ、残酷な仕打ちでもつて彼を壊し、人形を創り出したのだ。

「漸く気付けましたか？ 自分自身が生み出した矛盾に…。彼を得ようとすればするほど、それはあなたの望みから離れて歪んでいく。絶望した狼枝を好むあなたもいたけれど、彼との同居が新たに純粹な想いを育て上げた。僕にはそう見えませんでした」

狼枝 風斗が遠くから眺めるだけの憧れから気の置けない優しい友人へ変化した時に、行動を変えていればこんなことにはならなかつたのかもしれない。

「…：ははつ、俺つとんだ大馬鹿野郎だな…。：…。：。 出流は、どうして俺に…」

「迷つてるように見えたので。創は昔から鈍感でしたからね。僕が誘導してあげないと」

「ぐ…つ」

「もう1度良く考えれば、自ずと答えは見つかるでしょう。同じ方向を正しく見つめる限り、間違つた道へは歩まない…。そうですよ？」

神座はそこで言葉を切り、日向から狼枝に視線を走らせる。煌めく紅の瞳に冷たさは感じられない。ぼんやりとしていた狼枝だったが、コクンと小さくその問いに頷く。瞳の動きだけでそれに同意を示した神座は長い黒髪を梳いて、靡かせた。感情を明確に示さない彼にしては穏やかで風いだ顔付きたと日向は思った。会話が途切れ、寧靜な空気が流れ始めた頃、神座は「帰ります…」と素つ気ない単

語を最後に背中を向ける。黒髪がさらりと揺れ、ドアから出て行くとするのを日向は慌てふためきつつ「出流！」と呼び止めた。

「何ですか」

「ありがとうな」

「……ツマラナイ礼の言葉をどうも」

神座の口元が僅かに緩んだかのように見えたが、それは一瞬のことだったのでもしかしたら錯覚かもしれない。黒いスーツの背中を見送り、再び寝室はしんと静まり返る。日向は狛枝に向かい合うようにベッドに膝を突いた。体に巻いたタオルケットを胸元で握り締めた狛枝が放心したようにこちらを見ている。

2人きりの世界をずっと続けてきた。好きで、好きで、何物にも代えがたいほどに狛枝を愛している。彼を繋ぎ止めておきたくて、自分の中にあつた過剰なまでの妄想で傷付け、穢してしまった。一緒にいられて、とても幸せだった。しかし手に入れたと思つたその幸せは紛い物であつたし、結局狛枝の心までは自分のものにはならなかつた。

檻の中に閉じ込めた幸せは偽物だった。

闇の中にチラリと見えていた答えが漸く全貌を現したようだ。恐らく最初から間違つていたのである。勇気を奮い立たせて狛枝に声を掛けていれば、何かが変わつていたのかもしれない。借金などというキツカケがなくても、取り留めのない話をして笑い合うことが

出来たかもしれない。1つ屋根の下で狛枝と過ごした日々を懐かしく思いながら、日向は彼の両頬を手で覆つた。すりすりとお優しく擦つてやれば、狛枝は擦つたがりがら猫のようにくにくいやりと体を振らせた。

「風斗……。いや、……。狛枝」

「んうう……。？」

「もう、十分だ。……。ごめん。本当にごめん。俺はとんでもないことを、しちまつたんだよな……」

何を言つているのか分からないという風に、狛枝は唇を薄らと開けてきよんとしている。檻に捕らえた天使はそれだけでも美しいが、自由な空を羽はたいてこそより美しい。このままでは彼は彼でいられなくなる。この先2度と狛枝に会えなくなつてしまうだろうが、それは自分に対する罰であり、日向は一生引き摺つていく覚悟をしなければならぬ。重く受け止めろと何度も言い聞かせる。これは自分が彼に対して犯してしまつた罪なのだ。

「好き、だよ。狛枝……。俺は生涯、お前以外好きにならないし……、誰とも添い遂げる気はない。お前だけ。愛してるのは、お前だけなんだ……」

心からの愛の言葉を紡げば、狛枝は蕩けるような微笑みを浮かべてくれる。だがそれも全て日向の都合の良いように作られた妄想。健気にも希望を叶えようとしてくれる狛枝に胸を話まらせながら、日向は彼の体を包んでいるタオルケットに手を掛け、するりと捲つたそれをシートに落とす。透けるような麗しい白だ。日向しか知

らない最上級に抱き心地の良い体。鎖骨から指先を滑らせ、桃色の乳首の上でピタリと止める。ぶつんとした突起には銀色の小さなピアスが留まっていた。

「ひっ……」

「これも、もう必要ないんだよね……」

奴隷になって1週間ほどしてから付けたピアスだ。乳首という敏感な箇所穴を開けるのを、狛枝は最後の最後まで泣いて嫌がった。号泣する彼を後から抱き締めてあやししながら何とかオオルを噛ませた。そして乳首を氷で冷やして、慎重に針を刺したのだ。くぐもった狛枝の悲鳴と共に胸元に僅かに血の飛沫が散つたのを今も良く覚えてる。

「え……？ んううう……や、やあ……」

「じつとしてくれよ？ 今外すからな」

「ううっ、あ、あう……んっ、やらあ……！」

ぼろぼろと涙を零しながら、狛枝は嫌々と首を振った。しかしそれもまやかしなのだ。そう自分に言い聞かせて、日向は逃げようと身を引く狛枝の体を押さえつける。この銀色が胸に付いていると彼が自分のものだとしみじみ実感出来て良かった……。だが狛枝にとっては奴隷の象徴であり、忌まわしい代物だったに違いない。心からの懺悔と贖罪を込めて、丁寧な乳首のピアスを外した。

「な、何で……！ ひっく……ボクの……んう、取っちゃう……の？」

「俺のものじゃないからだ……」

「ひっ……ひっ……」

見開いたネフライトの瞳があつという間に潤んで、透明な雫が溢れてくる。鼻の頭を赤くしながら狛枝は日向が摘まんでいるピアスをじつと見つめた。気付くのが遅くなってしまったけれど、間違った関係を元に戻すなら早い方が良い。もちろん傷跡は残ってしまうし、何もなかったことにするのは難しい。だがせて自分の手で狛枝を檻の外へ飛び立たせられたら……。今の日向に出来る精一杯の償いだ。警察に突き出されても、金を返せと言われても文句を言っつもりはなかった。

「こつちも外そう。そしたらお前は自由だぞ。……どこに行ったって良い」

「い、行きたく……ない……っ！」

「……もう演技なんて要らないから。俺は……何をされても受け入れる。だから狛枝の好きにして良いんだ」

しゃくり上げる狛枝に微笑みながら、日向はポケットからチャリ……と小さな鍵を取り出した。ちゃちなリングで2つ1組にされた首輪の鍵だ。狛枝の首輪の錠前に挿し込もうとすると、彼は血相を変える。わなわなと唇を震わせている狛枝に「ごめん」と謝りながら、日向はカチリと鍵を開けた。潜らせていた錠前は取れ、ベルトを金具の下へ通せば簡単に狛枝から首輪が外れる。傍らに投げ捨てられた黒い首輪を凝視した狛枝は何かを言いたげに唇を戦慄させた。首から消えた重みが信じられないのか、何度も自分の首を触って確かめる。

「俺から、逃げてくれ……。出来るだけ遠くへだ。もしかたお前の姿

を見てしまったら、俺は狈枝を欲しがっちゃうから……」

「逃げる……って？ 意味……分からない、よ。何で、ボクは……！」
「今までずっとお前を苦しめてた俺のこと、そう簡単には許せないと思う。一生分の傷を負わせたようなんだから……。狈枝だって……嫌いな奴の傍になんて、いたくないだろ？」

日向の声が寢室に拡散したのを最後に、その場は静寂に支配された。狈枝は相変わらず涙を零していたが、瞳には明確な意思が宿っている。日向に付き従っていた頃のぼんやりとした弱々しい光が静かに滾る青い炎へと変わっていた。今まで溜まりに溜まっていた怒りが爆発したのかもしれない。普通に考えればそつだ。1発くらい殴られて痛みを与えられるのも悪くないし、最悪殺されてしまっても相手が狈枝であれば日向は満足だった。

「狈枝は分からないと思うけど、俺はお前のこと……本当に好きだったんだ。ただ……少し歪んでたんだと思う。懂れてもいたし、嫉妬もして……。自分のものにした……って思ったら、他は考えられなくな……って……こんな方法でしかお前を愛せなかった」

「当たり前……だよ。分かる訳ないでしょ？ キミは、おかしい……」

「っ！？」 狈枝……？」

久しぶりに聞いた彼の惻然な声に日向は驚いて目を見張った。喘ぎ声と簡単な意思疎通の言葉以外は発していなかった狈枝がかつての冷静な声色を取り戻したのだ。臉はやや腫れぼったかったが、凜とした緑灰色の水晶は淀みなく輝き、日向はその美しさにほうと溜息を吐いた。1度は瞳を閉じた狈枝だったが、唇を引き結んで

日向を真っ直ぐに見返す。

「嫌いな人の傍にいたいだなんて、誰が思うの？ ボクだってごめんだね、そんな苦行……。虫唾が走るよ」

「……すまなかった。もう2度とこんなことは……しないから」

「っ日向クンのバカ……！ 分からず屋！ ボクが何のためにキミと一緒にいたと思ってるんだい！？」

襟首を骨ばった手で掴まれる。そして力のままにグッと引き寄せられ、日向は目を白黒させた。慎ましやかで大人しかった狈枝のどこにこんな力が潜んでいたのかと驚愕する。剣呑な目付きで憤怒する彼に雄々しさすら感じた。啞然としたまま日向は狈枝からの問いに1つの答えを導き出す。

「何のため……、俺に命じられたからだろう？」

「はあ……、やっぱり何も分かってないんだね……」

ぐしやりと淡色の髪を片手で掻き乱した狈枝は、冷ややかな眼差しで日向を見やった。

「ハッキリ言つて、キミの管理能力はずさんだよ。逃げる隙なんていくらでもあった。学校行つてる間も、行為を終えて寝静まつてからでも、それこそ料理してる最中でも……」

「は……？ えっ、え……！」

「日向くん……、残念だけどボクはキミより頭が回るんだ。力では敵わないけど、ちよつと機転を利かせれば逃げるなんて朝飯前ああ、別に驕ってなんかないよ。冷静に状況を判断した上での考察……」
狈枝は両手をベッドに突いて、四足で日向へと迫る。今まで兎の

ように怯えて可愛らしかったのが、一瞬でしなやかな豹へと変貌する。ねつとりとした視線を日向に絡ませながら、狛枝は不敵に微笑んだ。そして尻餅を突いた状態の日向の膝を割り開き、するりと体を滑り込ませる。

「こ、狛枝……!」

「ねえ、ボク言ったよね? 嫌いな人の傍にはいたくないって……」

「? : : あ、ああ」

「……いつでも逃げられる状態なのに、どうして逃げなかったんだと思う?」

「それは……」

矛盾している。何故狛枝は逃げなかったのか? 顎に手を添えて考えを巡らせる日向にしな垂れかかり、狛枝はその頬をほっそりとした指先で撫でた。「何でかな……?」と吐息交じりのハスキーボイスを耳元で囁かれ、日向はゾクゾクと戦慄する。恐る恐る顔を動かして間近で狛枝と視線を合わせると、彼は切なげに目を細めた。

「ボクは日向クンと一緒にいたかったんだ。借金を背負わせたのは確かにキミだね……。でもボクにずっと付いて励ましてくれた日向クンだつて同じ日向クンだよ。あの時のキミは紛れもなくボクの希望だった」

「……つな、何でそんな……!」

「あはつ、ボクも頭がおかしいのかもしれないね。キミに囚われた時はショックだったけど、離れるのはもつと嫌だった……。例え奴隷だとしても、傍にいたかった」

「……狛枝……、本当に? これは……夢、か?」

「疑うならキミの頬を抓つてあげようか? 夢じゃないよ、日向クン。キミがもしボクに対して償いたいという気持ちがあるのなら、ずっとボクの傍にいて……愛して、絶対に離さないで……」

白い清廉な指が日向の唇を確かめるように撫でる。そしてシンメトリーの美しい顔が迫ってきたかと思えば、ふにっと柔らかいマシユマロのような感触が唇に触れた。狛枝からキスをされたと認識出来たのは、唇が名残惜しくも離れた後だった。その一連の動作はスローモーションのようにゆるりと流れたが、その間日向は微動だに出来なかった。

「……好き。日向クンが好きだよ……。どんなに酷いことされたって、ボクはキミが良いんだ」

「……あ……狛、枝……!」

「日向クンの奴隷になつてから良く分かったよ。キミは本当にボクしか見てないんだつてこと。思考回路は捻じ曲がっているけれど、キミは真剣にボクだけを見て、心の底から深く愛してくれた」

愛おしむように目を閉じた狛枝は日向の頭を抱きかかえ、短い髪の毛をゆつたりと撫でる。母性すら感じる身のこなしに、日向は童心に戻ったかのように無性に甘えなくなった。すらりとした腰に腕を回して抱き寄せると、狛枝はくすくすと花が綻ぶように笑みを漏らす。冷え切った冬枯れの時代を終えて、早春の風に生命が息吹くような……穏やかでぬくもりを感じさせる微笑み。胸が苦しくなるほど愛している狛枝本来の表情だった。

「キミは良くボクのこと…『天使みたいに綺麗で愛らしい』って褒めてくれたよね。ボクなんかが天使だなんて烏滸がましいにも程があるけど、嬉しかった…」

「お世辞でも何でも無いぞ。本当にそう思ったから言ったんだ…。狈枝は俺の天使だよ」

「んううう…っ。キミって何でそんな恥ずかしいこと、さらつと言えるの。ああ、もう…！」

照れているのか狈枝はカッと顔を赤くし、眉をハの字にしてみせる。可愛い、キスしたい…。そんな欲望をひた隠ししながらじつと顔を見ていると、日向の視線の意味が分かっていないのか狈枝はことりと小首を傾げた。泣いて、怒って、笑って…。とても生き生きとしていて、2人で助け合いながら暮らした共同生活の片鱗を感じさせる。少しずつ彼の表情が和らいできていた。

同じ方向を正しく見つめる限り、間違つた道へは歩まない…。

神座の告げた言葉が脳内をリピートする。きつとまだ間に合おう。もしかしたら戻れるかもしれない。そんな淡い期待が徐々に膨らんでいく。狈枝から自由を奪い屈服させていた過去より、彼に抱き締められて甘い甘い一時を堪能している今の方が何倍も幸せに思える。恐らく日向にとつて人生で1番幸せを感じられている瞬間だ。「片時も離れたくないよ、日向くん…。キミが望むなら、ボクは奴隷のままでも構わない」

「そ、そんなダメだ…！ 漸く気付いたんだ。俺に毒されて生きる力を失つたお前を見て、自分が犯した間違いに…。狈枝が狈枝らしく生きるためにはここにいちやいけ無い。翼を大きく広げられないこんな檻から飛び立たせてやらないとって」

真っ直ぐに狈枝を見据えて言い聞かせるも、目尻を下げた狈枝はそれに対して緩やかに首を振る。

「無駄だよ。飛び立たせても、きつと日向クンの元に舞い戻る。ずっと愛してもらつてたもん。ボクはキミの愛で生きてるんだよ」

「…っ分かってんのかよ！ 俺が…っ、お前に何をしたのか…！」
「分かってるよ。…キミがボクを天使と言うのなら、その翼を休める場所はキミの隣以外にありえない」

「狈枝…っ！」

半ば勢いのままに日向は狈枝を押し倒した。ほすんと白いシートに身を沈めた狈枝の頭の両脇に手を突いて見下げる。彼は突然のことに少し驚いたようだが、押し倒されたこと自体は嫌ではないようだ。すつと誘うように手を伸ばして、日向の顔をそつと当てる。その手がひんやりと感じるのは恐らく日向の熱が上がつているからだ。愛しさと嬉しさと興奮で思考回路が焼き切れてしまいそうなくらい熱い。

日向は吸い寄せられるように狈枝の顔に自分のそれを近付ける。だがキスをしようとして鼻を突き合わせた所で、日向は動きをピタリと止めた。こんな性根の腐り切った男を狈枝は本当に愛してくれるのだろうか？ チラリと鈍色の不安が訪れたがそれも一瞬で消

え失せる。狛枝が幸せそうに笑っていたからだ。それは全ての罪を許す天使の微笑みに見えた。

「はあ…。日向くん、来て…。ボクのこと、いっぱい…愛して？」

「…つすきだ、狛枝が、好き…。誰よりも、お前が…！」

「んう…っ、あつ…ふああツ、…はっ…、日向くん、日向クワン…！」
壊れ物を扱うかのような触れるだけのキスも、何度も唇を重ねるにつれて段々と深く激しいものになる。狛枝は赤い舌を出してぬらぬらと日向の口内を舐め上げた。甘い蜜のようなその味に夢中になつて、日向も積極的に舌を絡める。生温かくぬるりとした舌で歯列をなぞり、ちゅうと吸うと狛枝はビクビクと体を震わせてしがみ付いてきた。

「は…っ、んく…、狛枝…！」

「あう…、ひあたクン…？ んう…、はあ、んはあ…ッ！」

キスをしただけでどこも触っていないのだが、狛枝は目に涙を浮かべ、頬を薄らとピンク色に染めている。ふと視線を下に向けてると、さつきまで縮こまっていた彼のペニスがぶるぶると震えながら勃ち上がっていた。体を重ねることに狛枝は感じやすくなっていたが、キスだけで勃起するなど相当だろう。日向の視線の先にある己の屹立を、狛枝はやつと認識したようで「んううう…」と悩ましげに唸った。

「お前…、やつぱりエロいよ。キスだけで、こんな大きくして…！」
「何回キミに抱かれたと思ってるの…っ。もう条件反射だよ。つていうか、キミも人のこと言えないよね？」

狛枝は意地悪そうに唇を歪ませ、片膝を持ち上げる。そして日向の膨らんだ股間をぐりぐりと膝で刺激した。「く…っ」と眉間に皺を寄せて耐えようとするが、ダイレクトに心地好い痛みが響いてくるとお陰で凌げそうもない。狛枝が膝を動かす度に、ペニスは更に硬く大きくなり、ズボンを押上げてビクビクと動いていた。体に纏っている衣服が邪魔で、日向はシャツもズボンもパンツも脱ぎ捨てて生まれたままの姿になる。

裸の狛枝と向かい合つて、日向は生唾を飲み込んだ。初めて体を重ねた時よりもドキドキと心臓がうるさい。緊張してどう動いて良いか混乱していると、狛枝は骨ばった白い手を日向の体へと押し当てた。愛でるように触れられて、日向はひゅつと息を飲む。

「ボク、日向クンの体…好きだよ。筋肉質でしなやかで大きくて、男らしいよね」

「別に大したことないだろ、俺の体なんか…」

「そんなことないって。あはっ、おつきくなってるよ、キミのおちんちん。…舐めてあげるね？」

「つうあ…、こ、狛枝…！」

狛枝はペニスに両手を添えて、先端にちゅつと軽く口付けた。桜色の清純な唇が血管の浮いたグロテスクで赤黒い一物に触れるというだけで妙に興奮する。美しく無垢なものを穢し、自分色に染め上げる願望は男なら誰しも持っているだろう。何度抱いても狛枝の体は処女のように、とても幸運なことに日向はその楽しみを繰り返す味わうことが出来た。

「猫枝はべろりと舌を舐め上げて、裏筋を舌先でツンツンと突つき虐めた。鈴口からじわじわと染み出る先走りを舌で掬い取って、美味しそうに飲み込む。やがて口を開けて亀頭を迎え入れた猫枝が頭を動かした。ちゅぶつ、にゅぶぶ…じゅぶぶつ、ちゅぼちゅぼ…ちゅるつ…。猫枝が日向のペニスを可愛がる濡れた音が寝室に響く。」

「んっ、んっ…んう…ああ、ひなたくん、きもちいい？」

「ああっ、あ、きもちいい…、すごい…!! 舌がっ…うあ…こまえた」
体中に電撃が走ったかのように痺れ、ペニスの感覚だけがハッキリ伝わる。口に入り切らない幹の部分を両手で擦り、猫枝は一生懸命フェラチオをしていた。とろんとした顔で舌を這わせるその姿は色情狂いのような。気持ち良い…。自然と口を突くように腰が揺れていた。日向は朦朧とする意識の中、猫枝のふんわりとした頭を撫でた。湿った口の中でぎゅぎゅうに絞られて、どんどん射精感が込み上げる。腰回りから生まれた膨大な熱量が体中を駆け巡り、ガクガクと震えてきた。

「…っ!! 猫枝、出るっ、あ…、もう…ダメだっ。うっ…!!」

「!? ん、んううう…。ぶは…っ、はあ…、んんん…」

猫枝の喉奥を2度3度と突き上げて、思いっ切り口内へ精子を吐き出す。ちゅるちゅると吸い上げた猫枝は舌舐めずりをしながらペニスから唇を離した。上気した顔で嬉しそうに秋波を送った彼はレロっと舌を出して、上に乗ったごろりとした白濁を日向に見せてきた。泡立った白がゆつくりと舌の傾斜に沿って落ちていく。

「ふふ、いっぱい出たね」

「はっ…、は…、あ、猫枝あ…!!」

射精後の余韻でぼんやりとしている日向を横目に、猫枝は口を開じてゴクリと精子を嚥下してしまった。何という如何わしいシーンだ。淫猥過ぎて、くらくらと眩暈がしそうだ。

このままで良いのか。自分ばかりが気持ち良くなってどうする…。

日向は頭を振って、倦怠感を無理矢理体から追い出す。猫枝を愛しているからこそ、自分の手で最高の快楽を与えたい。猫枝の腰を支えながらベッドに寝かせると、胸元にキスの雨を降らせる。新雪のように清らかな彼の肌に赤い花を次々と咲かせた。

「んああ…っ、ふ、んんんっ、ひあたくん…。アンっ、ん…」

「気持ち良いか？ 猫枝…。たくさん…してやる、からな」

「はあ…、うあ…んん、うん…っ、して、して…!! あ…、ああ…」

乳首に軽く歯を立てれば、すべすべとした脚線美がピクンと痙攣してシーツの海を蹴る。痛みを癒すように優しく舌で舐めれば、足の指が悶えるかのように開閉した。薄い胸板から適度に引き締まった腹筋を滑り、緩く勃起した猫枝自身にそっと指を絡ませる。先走りで双球まで濡れたそれは温かく、優しく握ってやれば脈動が手に伝わってきた。くちゅくちゅと擦り、手の中で育っていくそれが愛おしくて日向は思わず口付ける。

「あっ…ああん…!! 日向くん…、やだよ…っ。おちんちん、舐められたら…ボク、」

「出したいか？」

「……ん…っ、日向クンので、イきたいな。ねえ、ボクのお尻に…挿れてくれる？」

両足を抱え上げて狼枝はアナルを日向に見せつける。ヒクヒクと収縮する桃色の入口に中指を挿し入れると、「んう…」と狼枝が息を詰まらせた。中はしっとりとしていて、解さなくても入りそうなほどに湧いていた。先程注ぎ込んだ精液でぐちゃぐちゃに濡れて、とろっと白濁が尻を伝って落ちていく。厭らしい光景にドクドクと血流が股間に集まり、日向のペニスがあつという間に硬さを取り戻した。

「す…いよ…、日向クン。さっき出したばっかりなのに…」

瞳をぐるぐると歪ませた狼枝は目の当たりにした希望にゾクゾクと体を震わせる。はあはあと犬のように短く呼吸をしつつ、日向の欲望が自分の体に挿入されるのを今か今かと輝かんばかりの瞳で見つめていた。「挿れるぞ」と耳元で囁くと何度も頷きながら、日向の首に腕を回す。アナルの位置を確かめながら日向は慎重に腰を進めた。

「つくそ…、狭いぞ…！ あ、ああ…何で、こんな…」

「あああ…っ、ひあたクンのおちんちん…。んぐ…、うううっ、おっさい…！」

アナル周りは可哀想なくらいに引つ張られ、太く逞しい日向自身がぐぶぐぶと中へ攻め入る。目をきつく瞑りながら、狼枝は歯を食い縛って痛みに耐えていた。ぎちぎちと締め上げるアナルに押し戻されそうになりながらやつとのことで根元まで全て収める。狼枝の

アナルは日向のペニスの形にびっちりとは拡がり、待ち人との逢瀬に喜んでいるのかきゅつきゅと弾むように包み込んだ。

「はあ…、は…！！ つ狼枝…、動くからな？」

「んああツ、突いてっ突いてえ…！！ 日向クン、…あつあつ、ああツ、ひい…っ」

内壁が浅ましく絡みつくのが辛抱出来なくて、日向は激しく腰を打ち付ける。狼枝は必死にしがみ付いて、泣きながら喘いでいた。ぐぶっ、じゅぶじゅぶッ、ちゅぷ、ちゅぼちゅぶッ…ぐちゅぐちゅッ！ 体だけでなく心も繋がったからだろうか、狼枝との一体感が今までとはまるで違う。全て湧けて混じり合うような不思議な感覚だ。ギシギシとベッドを軋ませながら我武者羅に突きまくる。

「狼枝っ、こまえた…っ、好きだ…！！ お前だけが、俺は…っ、ああツ」

「あつアンっ、日向クン、ひあたク…！！ ひあああツ、すきっ、おっさい…！！ んっんうう…！」

涎が口から漏れるのも気にせず食べるようにキスをする。狼枝の唇が日向のそれを求めている。狼枝の声が日向の名前を奏でている。それだけで日向は昇天してしまいそうだった。今度こそ間違わない。狼枝を傷付けずに真つ直ぐに愛したい。日向の全てでもって、彼を幸せにするのだ。

「っ…あ…、愛してるぞ…！！ 狼枝、…ずつと、愛してる…っ、狼枝…！」

「はああツ、んっ、ボクも…っ、日向クン、あいしてるよ…！！ あ

「あつあ、」

「んっ…中に、出すからな…。今度こそ…お前を、幸せにするから」

「うん、うん…！ 嬉しいよ、日向クン…。ボクはキミと、幸せに…っ、…んあ、ああ、ひっんひい、イツちゃ、う…、あんっ、ああッ…イク…っ、イク…！ んううう…ッ！」

「!! う…く、こまえた、あ、俺も…、うっ、く…ッ！」

日向は狼枝への愛をふつけるように渾身の力を込めて射精した。狼枝も体をガクガクと大きく揺らし、ペニスから数回に分けて白濁を散らす。息を切らしながら、今までにない満足感に日向は打ち震えていた。初めて想いが通じ合った2人の愛し愛されるセックスだ。このまま死んでしまっても良い…。そんな願望が頭に思わず浮かんでしまうほど甘美で濃厚なまぐわいだった。

「はあ…っ、あ…、ああ…、ふ…、はーッ」

「…あんう、ん…、は…はあ、んうう…、んっ」

夢のような心地に全身が熱く、いつまでも震えが収まってくれない。それは狼枝も同様らしく、額に汗を浮かべてぜいぜいと荒く呼吸を繰り返していた。残った力を掻き集めた日向は狼枝からペニスを抜いて、彼の隣にどさりと横たわる。曇りなき天使のネフライトは美しい光を湛えて、日向を優しく見つめていた。

「狼枝…、今まで俺がしてきたことは、その…」

「良いんだ。きつとキミもボクと一緒で檻に閉じ込められてたんだ。出口が見つからなくて1人で彷徨ってた。でももう1人じゃない

もんね。ボクがいるよ…」

狼枝の情け深い言葉に日向は何も言えなかった。こんな自分を許してくれるのか…。ツンと目の奥が痛んで、日向の目からは涙が溢れた。どうしようもない歪んだ男を天使は諾うと言っている。

「俺は、1人じゃない…」

「うん。一緒に外に出よう？ 2人ならきつと大丈夫。大丈夫だから…」

狼枝がそっと日向の手に自分のそれを重ねる。日向はすぐに手を裏返し、ぎゅっと握った。少だけ自分より低いがほんのり温かい狼枝の手。彼を好きになって良かった。安心感からか行為の疲れがどつと日向に押し掛かってくる。うとうとと微睡みながら、日向は瞼を閉じた。 「日向クン…？」と透き通った美しい声が耳を緩やかに撫でる。気持ちが良い。愛しい人に見守られて眠ることがこんなに幸せだなんて知らなかった。

「…狼枝。好き、だ。愛して、る…」

ぼやけた視界の中で天使がふわりと微笑む。ああ、とても眠い。握った手の感触を強く意識しながら、今度こそ日向の視界は深淵に染まった。

目が覚めたら、天使と一緒に檻から飛び立つ。

発行者：ユリクシ(AgNo3)
発行日：2014/5/3
Web：http://argentum.seth.jp/agno3_yuri/
Twitter：@agno3_yuri
Pixiv：866588
Mail：agno3_yuri@yahoo.co.jp

印刷所：STARBOOKS 様
素材：水珠様 <http://sora.saiin.net/>

無断転載・オークションなどへの出品はご遠慮下さい。

Not For Sale ! (この本は無料配布です)